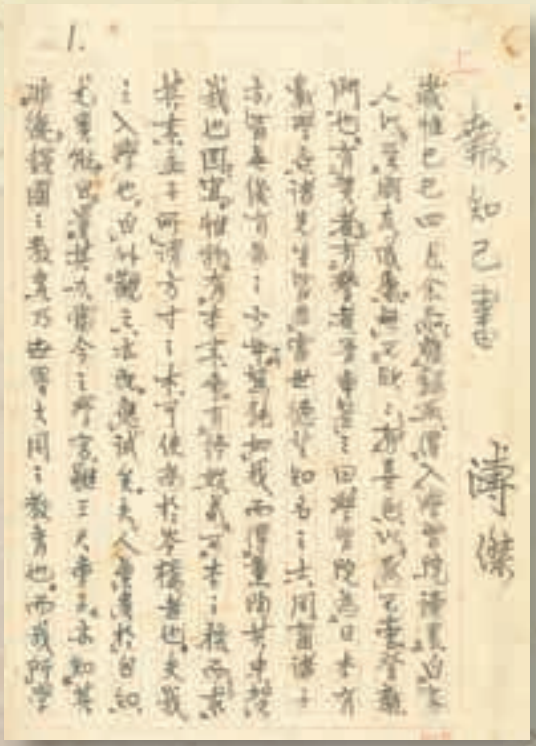
二松學舍創立一四〇周年記念

新収資料展

近代漢学の諸相



二松學舍創立一四〇周年記念
平成二九年度　二松學舍大学資料展示室　企画展図録

新収資料展

近代漢学の諸相

新収資料展

近代漢学の諸相

目次

はじめに（町　泉寿郎）　03

一　加藤天淵資料（寄託資料）

01 加藤虎之亮写真　04
02 加藤虎之亮夫妻写真（昭和30年）
03 鳳凰硯（明治26年下賜）　05
04 静岡県師範学校時代の写真（明治33・35年）　06
05 静岡県師範学校の卒業証書（明治36年）　07
06 広島高等師範学校の卒業写真（明治41年）
07 東宮職嘱託辞令（大正15年）　08
08 皇后宮職嘱託辞令（昭和5年）
09 皇后御進講予定通知（昭和6年）
10 皇后御進講御休課ノ件通知（昭和8年）
11 皇后陛下進講日録（昭和23年）　09
12 山本五十六誄草稿（初校）（昭和18年）　10
13 山本五十六誄草稿（再校）
14 山本五十六墓誌草稿（初校）　11
15 山本五十六墓誌草稿（再校）
16 山本五十六墓誌（定稿）　12
17 山本五十六墓誌（拓本）　13
18 陸海軍人ニ賜リタル勅諭（案）（昭和20年）　14
19 軍職ヲ解カルルニ方リ皇族陸海軍武官ニ賜ル勅語案（昭和20年）
20 開院式勅語案（昭和20年）　15
21 開院式勅語案
22 御命名草案（昭和12年）　16
23 追号私議（昭和26年）　18
24 御進講草案（昭和21年）　19
25 皇太子成年式ノ寿詞（昭和27年）　20
26 立太子礼ノ寿詞（昭和27年）
27 皇太子殿下ノ御詞（案）　21
28 奉賀皇太子殿下挙行立太子礼并成年式典
29 学位記（昭和10年）　22
30 『周礼経注疏音義校勘記』原稿（昭和32年）
31 紫綬褒章の記（昭和33年）　23
32 二松學舎専門学校辞令（昭和4年）
33 判定書（昭和21年）
34 日記（昭和33年）　24
35 狩野直喜書簡（昭和19・5・10）　26
36 狩野直喜書簡（昭和19・10・13）
37 山田準「賀章」（昭和26・10）　28
38 山田準書簡（昭和24・12・17）　29
39 鈴木虎雄書簡（昭和30・6・17）　30
40 鈴木虎雄五言古詩「寄上加藤天淵博士」

二　野崎萬三郎関係文書（白岩龍平書簡等）

41 「（野崎武吉郎・白岩龍平）条約書」　31
42 白岩龍平書簡（明治25・4・19）　32
43 白岩龍平書簡（明治27・11・3）　33
44 白岩龍平書簡（明治30・1・10）　34
45 白岩龍平書簡（明治32・4・25）　35

三　芳野家資料

46 芳野金陵撰「新建篠山学記」拓本　36
47 川田甕江撰「安井息軒先生碑銘」拓本　37
48 芳野世経撰并書「竹内隆卿墓表」拓本　38
49 桜井熊一書幅「斯波将軍帰日琉球次韻賦呈」　39
50 塩谷時敏書画幅「戊子四月逢原会賦似諸彦」　40
51 愛新覚羅溥傑と郭布羅潤麒の作文　41
①溥傑「報知己書」（昭和4・4）
②溥傑「最近之感想」（昭和5年）　42
③溥傑「旅行」　43
④潤麒「旅より」
⑤潤麒「スキー旅行」　44

凡例

一、本書に使用する漢字の用字は、常用漢字体など通行の字体を基本としたが、一部、翻字においては原資料に近い漢字体を使用し、変体仮名は通行の平仮名・片仮名に改めて表記した。

二、図版解説は、4～25ページまでは川邉雄大が、26～44ページまでは町泉寿郎が分担執筆した。

三、本書は二松學舎大学資料展示室の企画展「新収資料展―近代漢学の諸相」（展示期間二〇一八年三月一日～二二日）の展示図録を兼ねるものである。

はじめに

二松學舍大学　教授　町　泉寿郎

昨年十二月に開催した「三島中洲と近代 ―其五　二松學舍の漢学教育」の展示図録でも言及したが、現在、本学で推進している私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本の「知」の形成と漢学」（略称ＳＲＦ）によって、一九世紀以降の近代漢学資料の収集が促進しつつある。今回はそれらの新収資料を中心に展示することとした。

漢学者加藤虎之亮（一八七九～一九五八、天淵と号す）の資料は今回初めて展示するもので、そのご子孫から本学での整理作業後その多くを寄贈いただくことを前提として寄託いただいている資料である。加藤虎之亮は広島高等師範学校において三宅少太郎教授に学んで校勘学に長じ、『周礼経注疏音義校勘記』の著書で知られる一方、香淳皇太后への長年の進講をはじめとする宮内省関係の諸活動でも知られ、日本近代の漢学が持った研究と教育の両面におけるあり方をよく示す人物である。今上天皇の退位を一年後に控えたいま、加藤虎之亮の宮内省関係資料を通して、激動の昭和前期を振り返るよすがとしたい。山本五十六の戦死、戦後初の帝国議会開院式、今上天皇の立太子礼といった時代の変化の中で発せられた言葉、その一方で持続されていた漢籍進講の記録等から、漢学が二〇世紀前半の日本を表象する要素として欠くことができないものであったことを更めて思う。

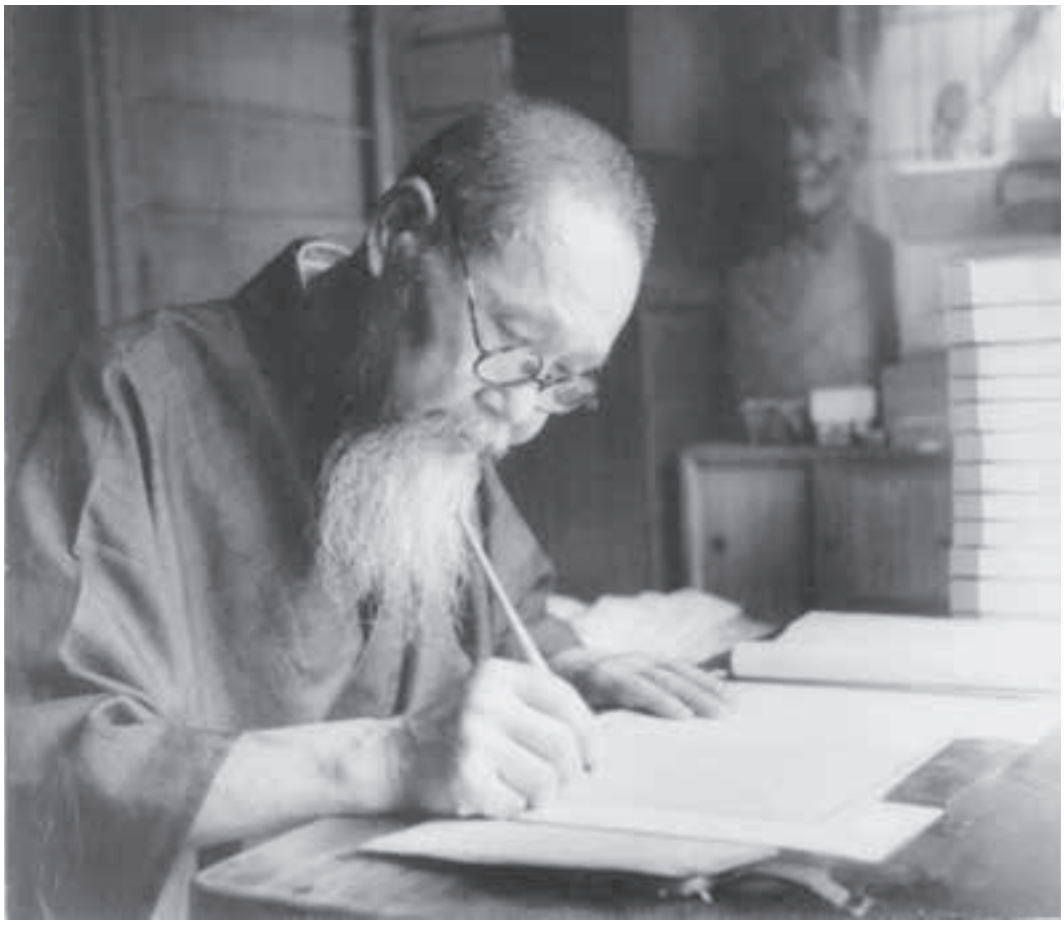
芳野家資料は二〇一四年に受け入れて以来、整理と補修を続けてきたもので、幕末大儒金陵（一八〇三～一八七八）と嗣子世経（一八四九～一九二七）、孫幹一（一八八五～一九七〇）の三代に亘る資料である。今回は補修を終えた資料の中から、明治以降の世経と幹一の関連資料などを展示する。

野崎萬三郎（一八三九～一九一〇）文書は、近年取り組んできた「岡山の漢学者資料」の一環として収集し、研究を進めている。今回は、従来の二松學舍史の中ではほとんど登場しないが、日中貿易・日中交流の開拓者として知られる実業家白岩龍平（一八七〇～一九四二）の書簡を展示する。

創立一四〇周年にあたり、こられの資料が近代漢学の内包する諸問題を考えるための一助となれば幸いである。

平成三〇年三月

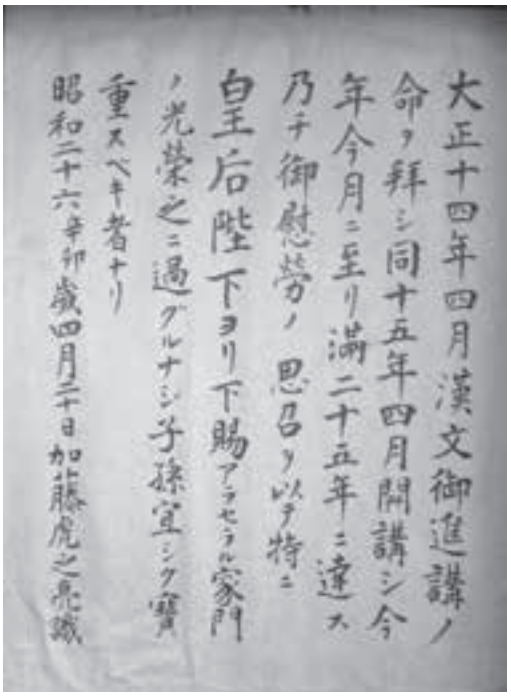
1 加藤天淵資料（寄託資料）



上段　*01*　加藤虎之亮写真

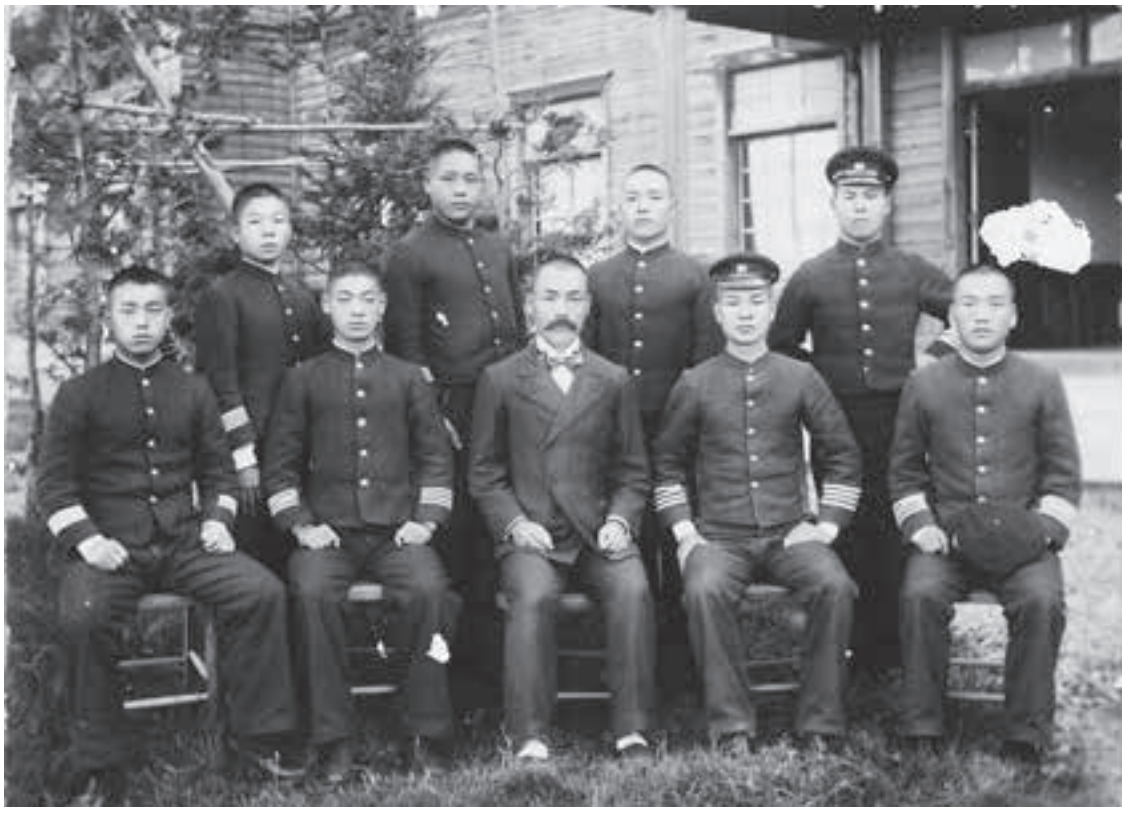
下段　*02*　加藤虎之亮夫妻写真（昭和30年〈1955〉9月）

裏書きに、「昭和三十年九月撮影／喜寿虎之亮／古稀梅恵」とある。



03 鳳凰硯（昭和26年〈1951〉4月下賜）

加藤は、大正15年（1926）から約30年にわたって香淳皇后の侍講をつとめた。この鳳凰硯は侍講25年を記念して、昭和26年に皇后より下賜されたものである。蓋に金黄元が日清戦争の古戦場を詠じた句「長城一面溶溶水、大野東頭点点山」が、裏に「朝鮮平壌府」と刻されており、加藤による箱書きがある。この鳳凰硯下賜に際しては、漢学者など多くの人物から記念の漢詩が贈られている。なお、昭和22年（1947）には、長年にわたって侍講をつとめた加藤に、皇后から短歌と真綿が下賜された。このほか加藤には、昭和天皇や皇后より菓子・煙草・銀杯などが、北白川宮からは人形などが下賜されている。

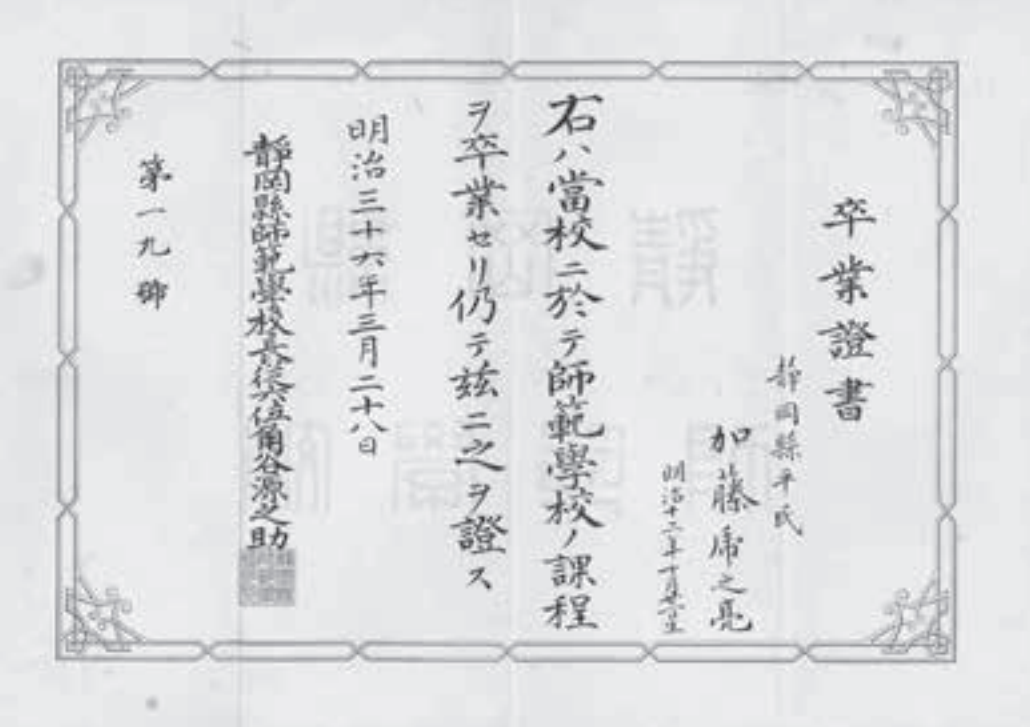


上段 *04-1* 静岡県師範学校時代の写真　（明治33年〈1900〉3月3日）

裏書きに、「中駿有義会員一同」などとある。前列右から３人目が加藤。

下段 *04-2* 静岡県師範学校時代の写真　（明治35年〈1902〉10月19日）

裏書きに、「明治三十五年度前半期単級部受持教生」などとある。後列右から３人目が加藤。



卒業證書

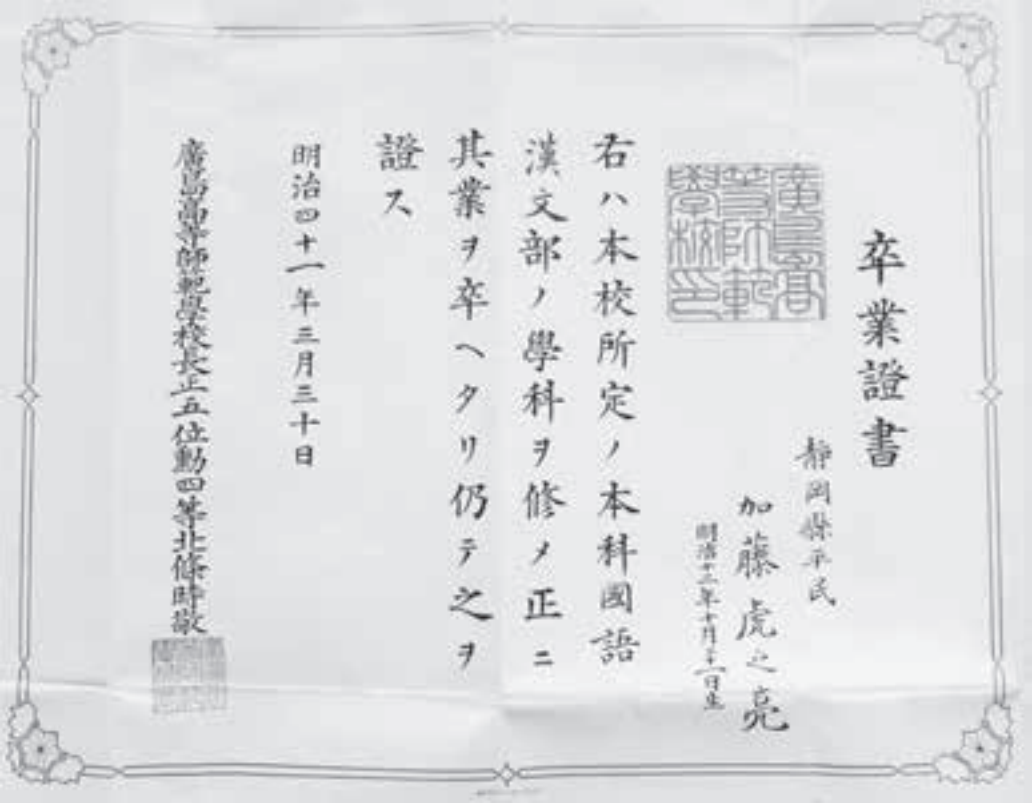
静岡縣平民
加藤虎之亮
明治十二年十月十一日生

右ハ當校ニ於テ師範學校ノ課程ヲ卒業セリ仍テ茲ニ之ヲ證ス

明治三十六年三月二十八日

静岡縣師範學校長從五位勲四等谷源之助

第一九號



卒業證書

静岡縣平民
加藤虎之亮
明治十二年十月十一日生

右ハ本校所定ノ本科國語漢文部ノ學科ヲ修メ正ニ其業ヲ卒ヘタリ仍テ之ヲ證ス

明治四十一年三月三十日

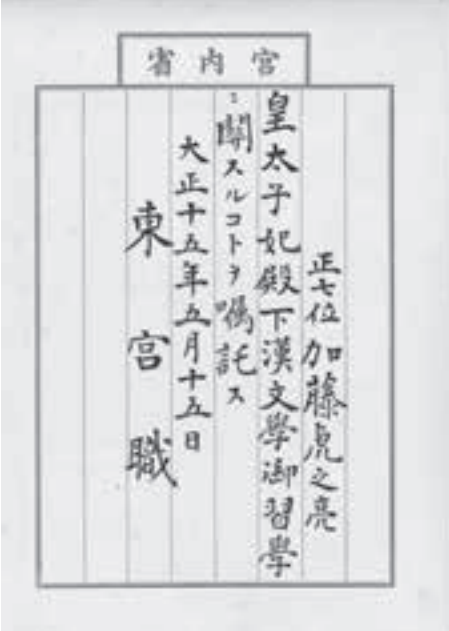
廣島高等師範學校長正五位勲四等北條時敬

上段 *05* 静岡県師範学校の卒業証書　（明治36年〈1903〉3月28日）

加藤は、静岡師範卒業後、県内小学校の訓導を経て、広島高師へ進学した。

下段 *06* 広島高等師範学校の卒業証書　（明治41年〈1908〉3月30日）

加藤は広島高師では、金沢出身の漢学者である三宅少太郎教授（号真軒）に師事し、漢籍の校勘について厳しい指導を受け、のちに無窮会で真軒文庫の整理にも従事した。なお、高師の同級生に、沖縄諮詢会委員長・沖縄民政府知事・琉球大学学長をつとめた志喜屋孝信（1884 ～ 1955）らがいる。

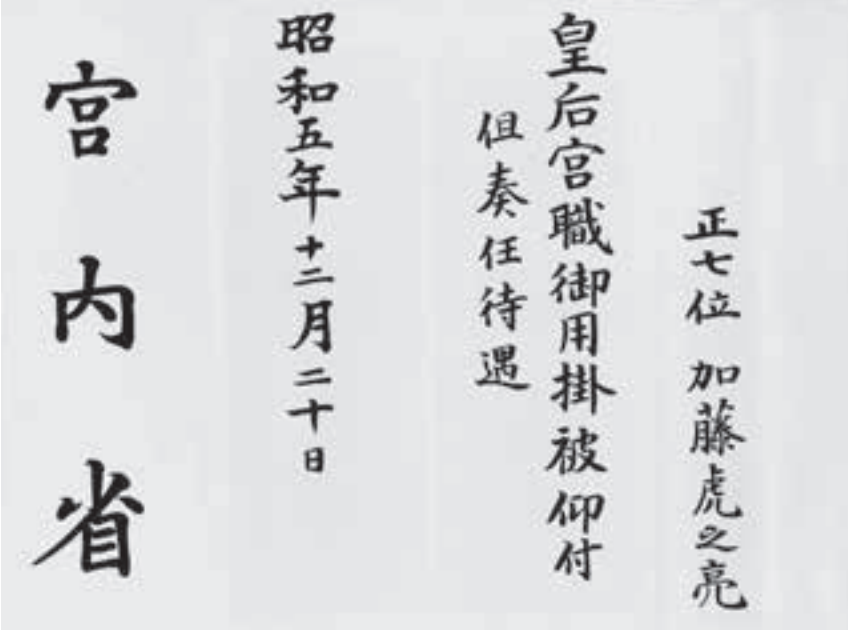

宮内省

正七位 加藤虎之亮

皇太子妃殿下漢文學御習學ニ關スルコトヲ囑託ス

大正十五年五月十五日

東宮職

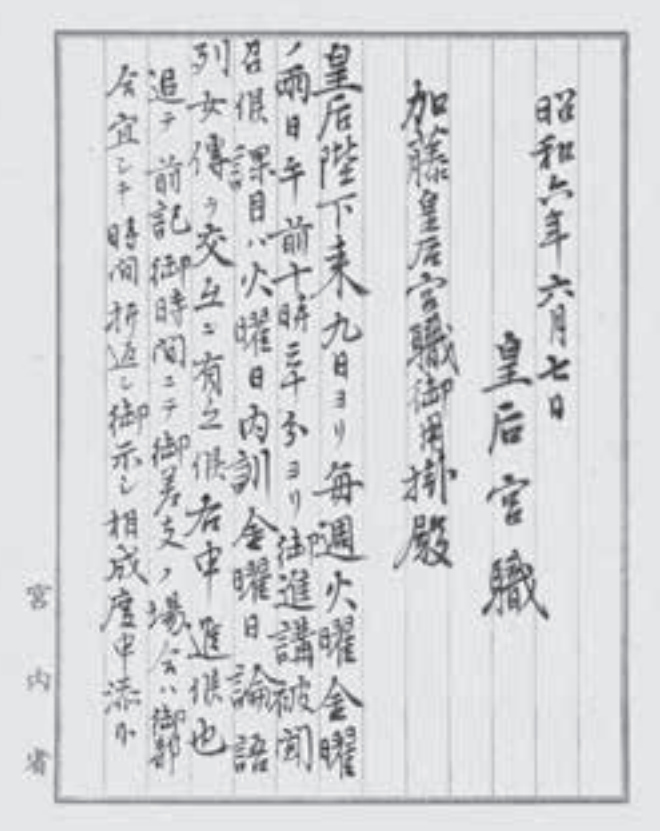

正七位 加藤虎之亮

皇后宮職御用掛被仰付

但奏任待遇

昭和五年十二月二十日

宮内省


昭和六年六月七日

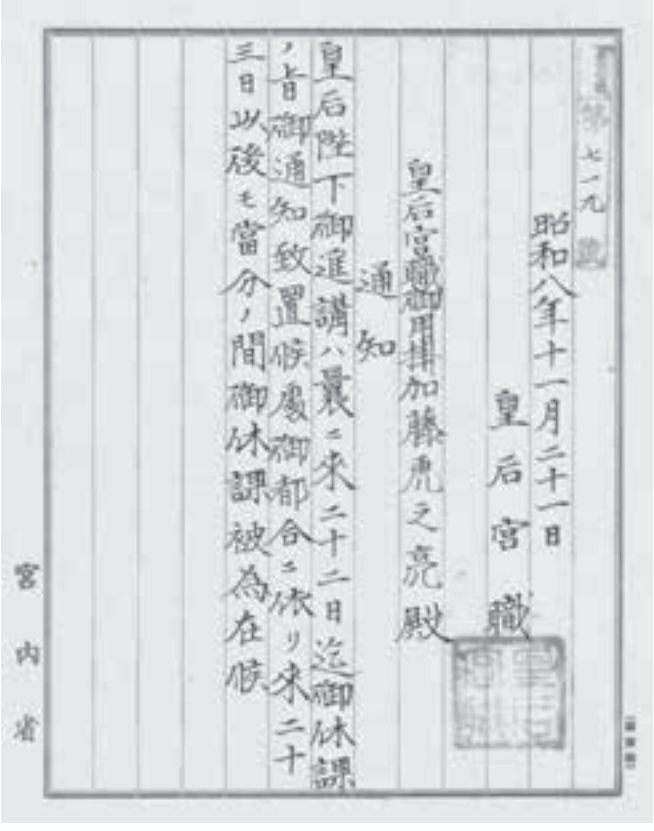
皇后宮職

加藤皇后宮職御用掛殿

皇后陛下来九日ヨリ毎週火曜金曜ノ兩日午前十時三十分ヨリ御進講被聞召候課目ハ火曜日内訓金曜日論語列女傳ヲ交互ニ有之候右申進候也

追テ前記御時間ニテ御差支ノ場合ハ御都合宜シキ時間御繰延シ御示シ相成度申添ル

宮内省


昭和八年十一月二十一日

皇后宮職

皇后宮職御用掛加藤虎之亮殿

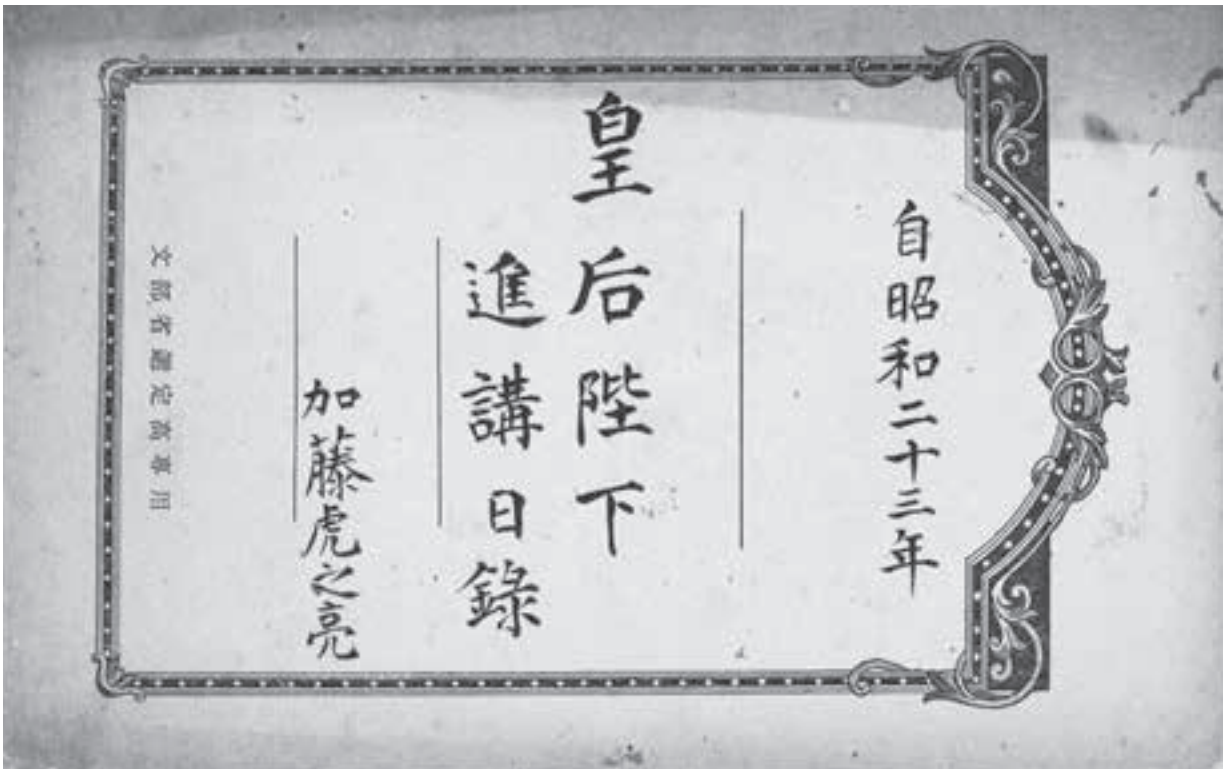
通知

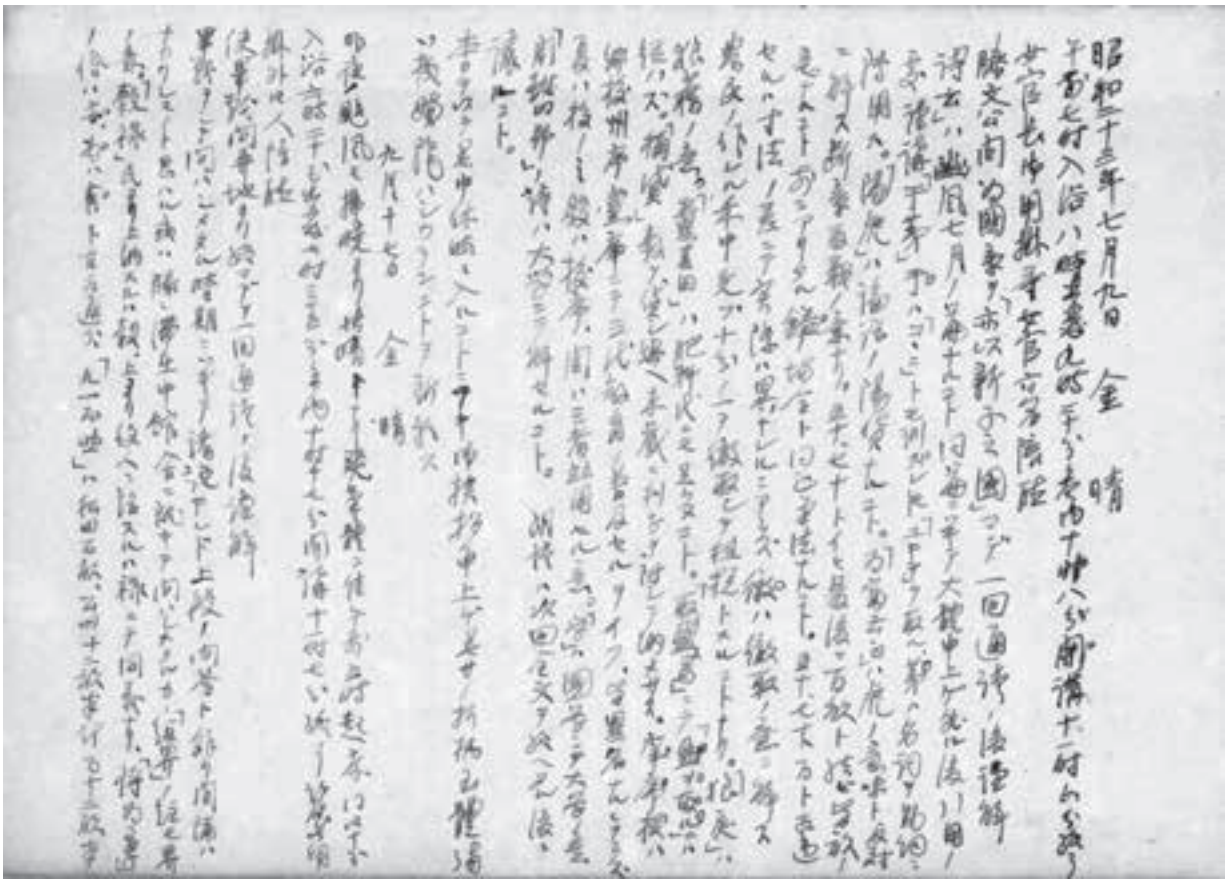
皇后陛下御進講ハ最ニ来二十二日迄御休課ノ旨御通知致置候處御都合ニ依リ来二十三日以後モ當分ノ間御休課被為在候

宮内省

上段左	*07*	東宮職嘱託辞令（大正15年〈1926〉5月15日）
上段右	*08*	皇后宮職嘱託辞令（昭和5年〈1930〉12月20日）
下段左	*09*	皇后御進講予定通知（昭和6年〈1931〉6月7日）
下段右	*10*	皇后御進講御休課ノ件通知（昭和8年〈1933〉11月21日）

加藤は皇后宮職嘱託として、30年にわたって香淳皇后の侍講をつとめた。このたび寄託された資料には、辞令・招待状（晩餐会など）が多数所蔵されている。図版10「皇后御進講御休課ノ件通知」は、皇太子（今上天皇）懐妊のため、休課を知らせる通知である。その後も、義宮（常陸宮）懐妊のため休課となっている。

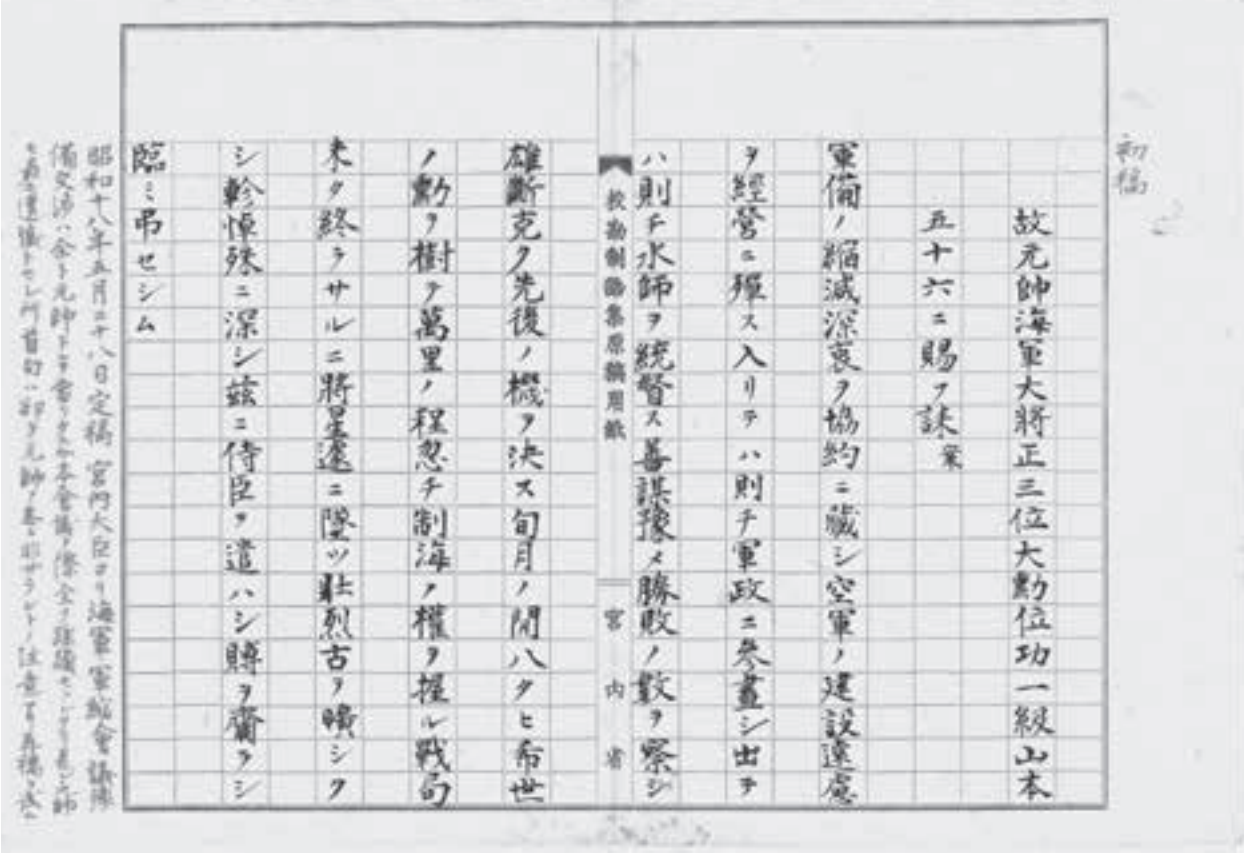




上段 *11* 「皇后陛下進講日録」第4冊（昭和23年〈1948〉）

下段 *11* 「皇后陛下進講日録」第4冊第1頁（昭和23年7月9日）

「皇后陛下進講日録」は、大学ノート4冊（①昭和7～12・②昭和12～18・③昭和18～23・④昭和23～32）に亙って万年筆で記されており、金曜日に御進講が行われている。参内の前には必ず早朝に入浴してから出かけていることが分かる。



初稿

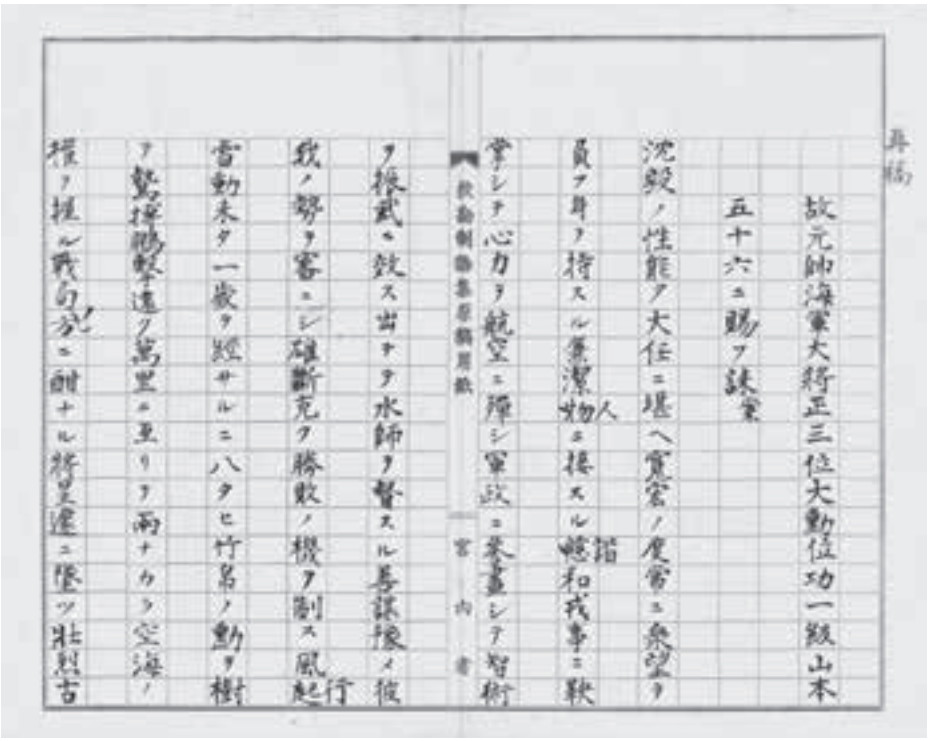
故元帥海軍大將正三位大勲位功一級山本
五十六ニ賜フ誄案

軍備ノ縮減深哀ヲ協約ニ藏シ空軍ノ建設遠慮
ヲ經營ニ殫ス入リテハ則チ軍政ニ參畫シ出テ
ハ則チ水師ヲ統督ス善謀遠メ勝敗ノ數ヲ察シ

【教勅制勅案原稿用紙　宮内省】

雄斷克ク先後ノ機ヲ決ス旬月ノ間八タヒ布世
ノ勲ヲ樹ツ萬里ノ程忽チ制海ノ權ヲ握ル戰局
未タ終ラサルニ將星遽ニ墜ツ壯烈古ヲ曠シク
シ軫悼殊ニ深シ茲ニ侍臣ヲ遣ハシ賻ヲ齎ラシ
臨ミ弔セシム

昭和十八年五月三十一日定稿　宮内大臣ヨリ海軍軍令部ニ諮詢
備考　涉ハ金ト元帥トヲ含ミタル本會議ノ條文ヲ除去シ
モ為遺族トセレ所首相ハ初メ元帥ノ墓ニ祭ラレトノ注意ヲ再稿ス



再稿

故元帥海軍大將正三位大勲位功一級山本
五十六ニ賜フ誄案

沈毅ノ性能ヲ大任ニ堪ヘ寬容ノ度常ニ衆望ヲ
負フ身ヲ持スル潔人物ニ接スル穆和我事ニ歩
掌シテ心力ヲ航空ニ殫シ軍政ニ參畫シテ智術

【教勅制勅案原稿用紙　宮内省】

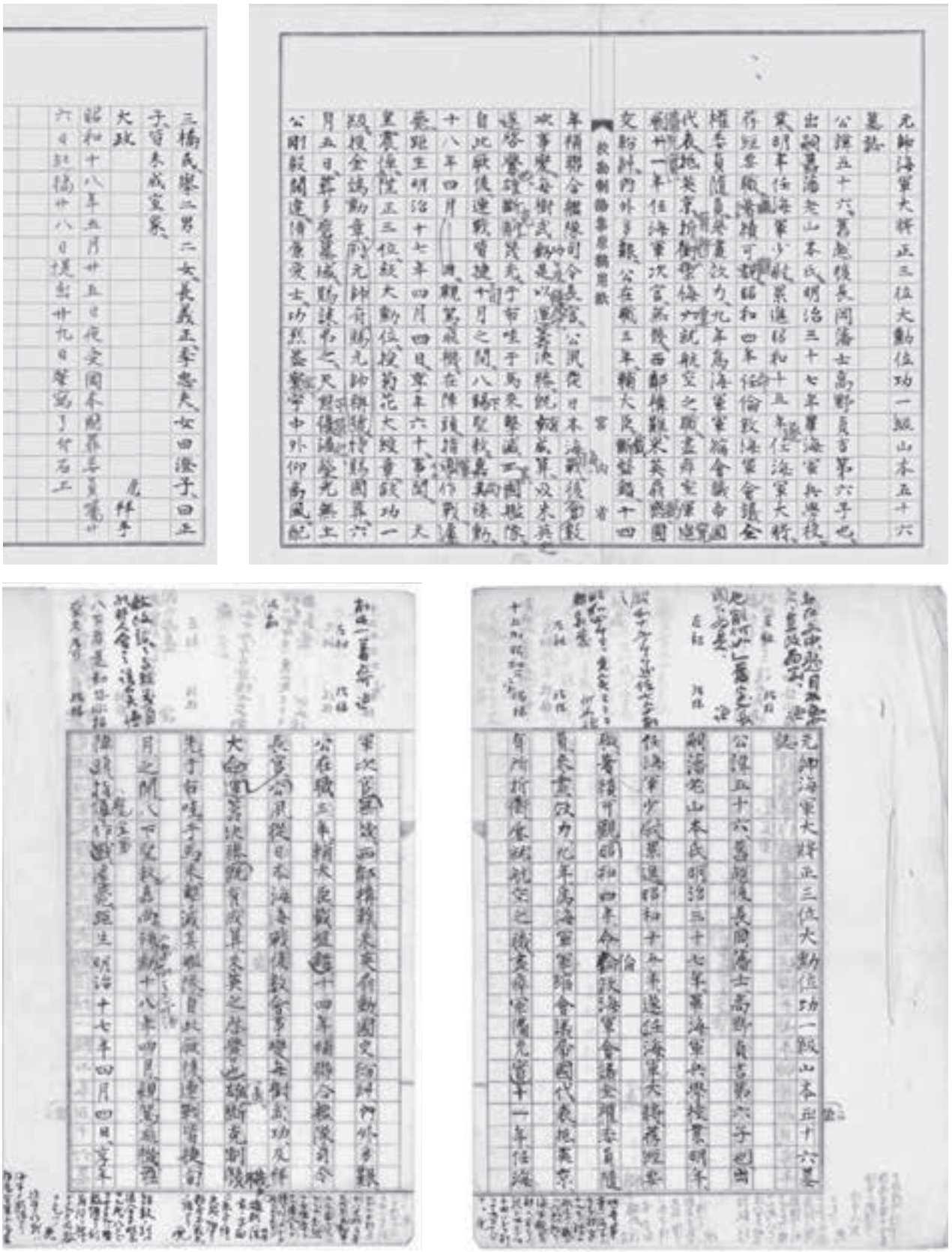
ヲ振武ニ效ス出テテ水師ヲ督スル善謀遠メ彼
我ノ勢ヲ審ニシ雄斷克ク勝敗ノ機ヲ制ス風起行
雷動未タ一歲ヲ經サルニ八タヒ竹帛ノ勲ヲ樹
ツ勢掃鵬擊遠ク萬里ニ亘リテ兩ナカラ空海ノ
權ヲ握ル戰局未タ酣ナル將星遽ニ墜ツ壯烈古
ヲ曠シクシ軫悼殊ニ深シ茲ニ侍臣ヲ遣ハシ賻
ヲ齎ラシ臨ミ弔セレム

昭和十八年五月三十一日定稿　六月一日提出
宮内大臣　内大臣共ニ異議ナシ

上段 *12* 山本五十六誄草稿（初校）（昭和18年〈1943〉5月）

下段 *13* 山本五十六誄草稿（再校）（昭和18年〈1943〉5月）

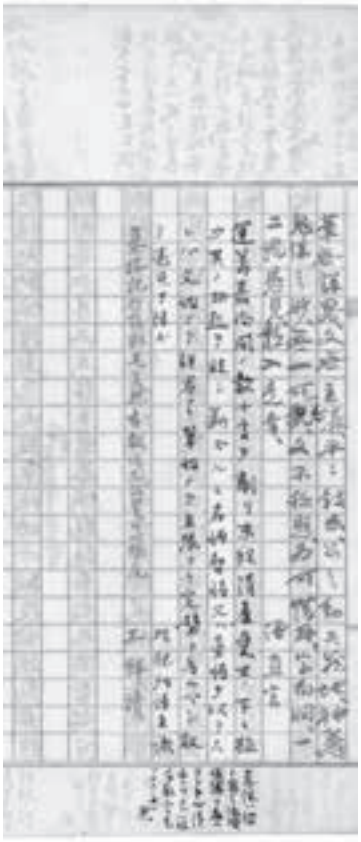
加藤は昭和17年（1942）以降、皇族または功臣薨去の際に、天皇が下賜する誄・御沙汰書の起草を行っている。昭和18年4月18日に戦死した聯合艦隊司令長官・山本五十六の誄および墓誌銘も加藤が作成し、数度の添削を経て完成し、内閣より潤筆料として金100円が支払われた。加藤は、山本のほか清浦奎吾（元首相）・金子堅太郎（元枢密顧問官）等の誄・御沙汰書を起草している



上段 *14* 山本五十六墓誌草稿（初校）（昭和18年〈1943〉5月25日）

下段 *15* 山本五十六墓誌草稿（再校）（昭和18年〈1943〉5月）

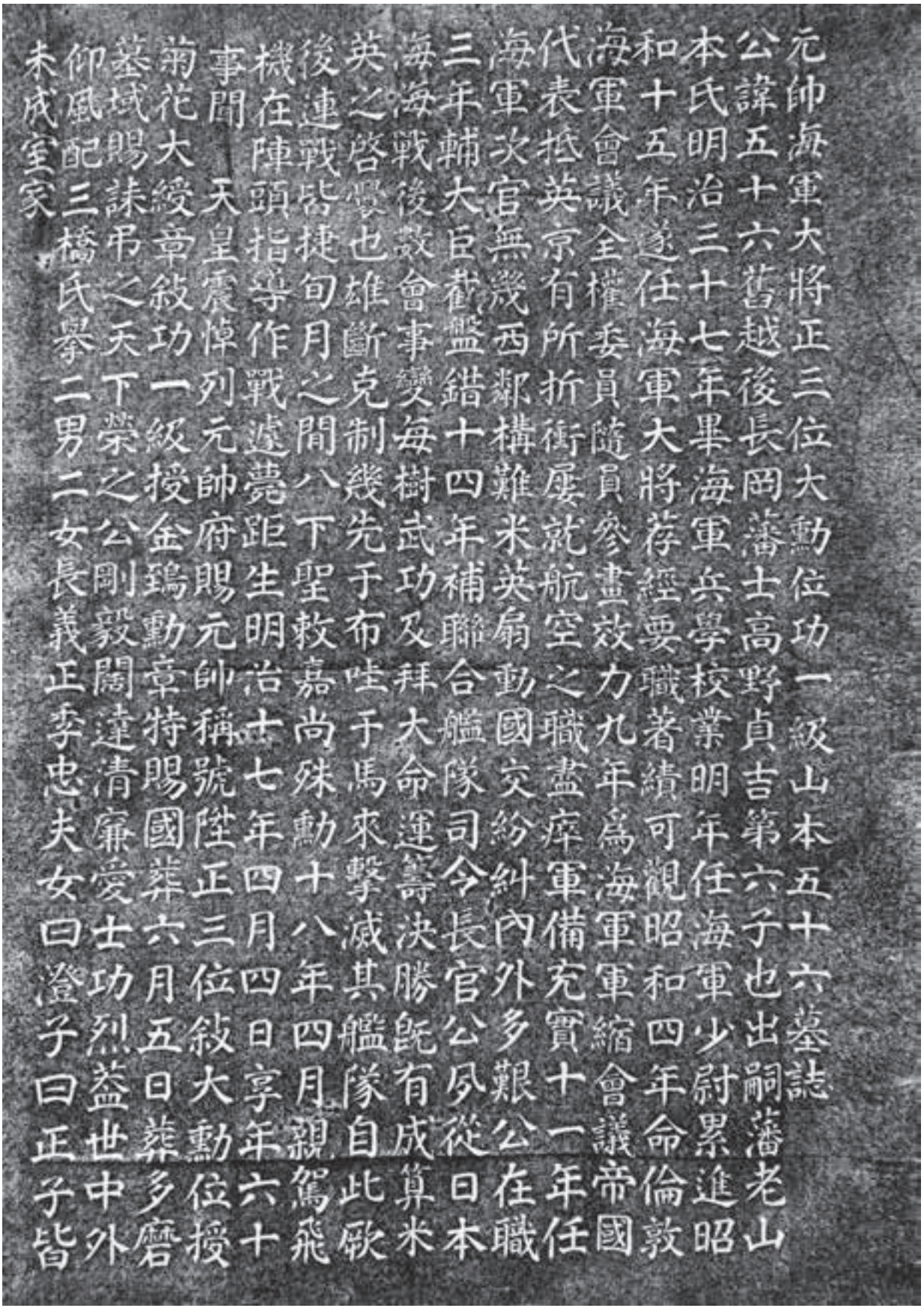
柱刻に「校勘制誥集原稿用紙」とある用箋は、宮内省で詔勅などの起草の時に使用されたものであり、墓誌が天皇による誄と併せて制作されたことが窺える。墓誌の草稿には、細田謙蔵・川田瑞穂らの添削が見られる。



上段 *15* 山本五十六墓誌草稿（続き）

下段 *16* 山本五十六墓誌（定稿）（昭和18年〈1943〉5月26日）

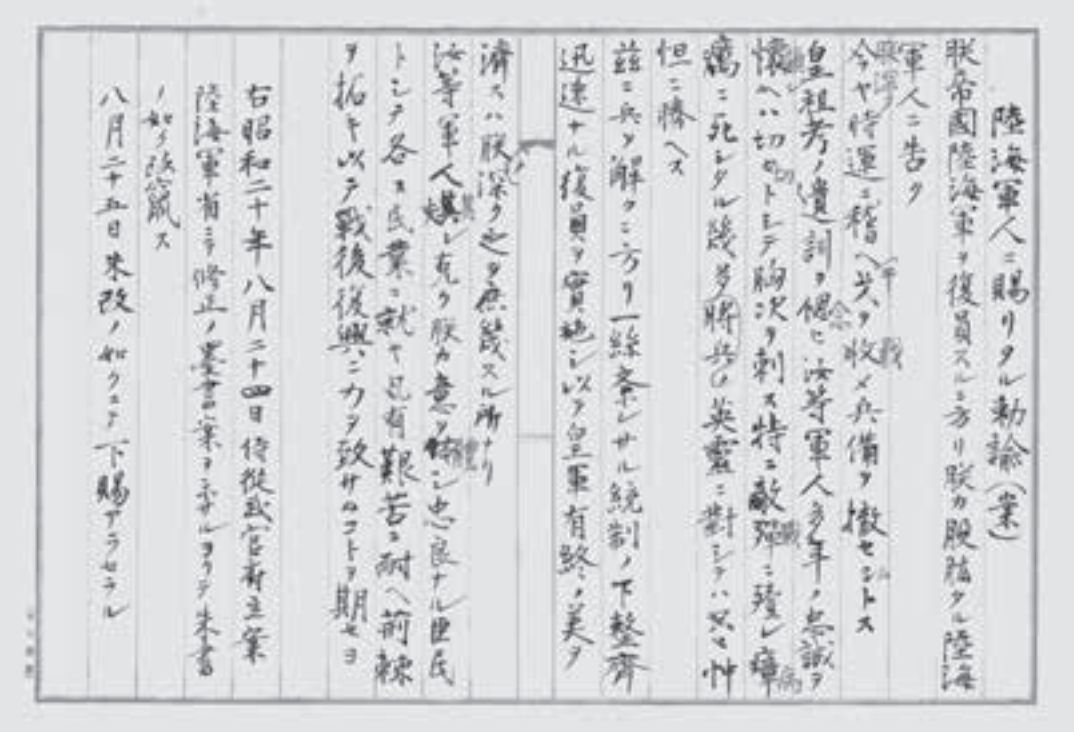
柱刻の「書原選述所」は、宮内省に奉職していた漢学者吉田増蔵（1866 ～ 1941、号は学軒）が対支文化事業予算によって着手した文字学の編纂事業所（吉田の自宅に開設）。吉田の歿後、不要になった古紙を利用したものと考えられる。



元帥海軍大將正三位大勳位功一級山本五十六墓誌
公諱五十六舊越後長岡藩士高野貞吉第六子也出嗣藩老山
本氏明治三十七年畢海軍兵學校業明年任海軍少尉累進昭
和十五年遂任海軍大將荐經要職著績可觀昭和四年命倫敦
海軍會議全權委員隨員參畫效力九年爲海軍軍縮會議帝國
代表抵英京有所折衝屢就航空之職盡瘁軍備充實十一年任
海軍次官無幾西鄰構難米英扇動國交紛糾內外多艱公在職
三年輔大臣截盤錯十四年補聯合艦隊司令長官公夙從日本
海海戰後數會事變每樹武功及拜大命運籌決勝既有成算米
英之啓釁也雄斷克制幾先于布哇于馬來擊滅其艦隊自此歐
後連戰戰捷旬月之間八下聖敕嘉尚殊勳十八年四月親駕飛
機在陣頭指揮作戰遽薨距生明治十七年四月四日享年六十
事聞　天皇震悼列元帥府賜元帥稱號陞正三位敍大勳位授
菊花大綬章敍功一級授金鵄勳章特賜國葬六月五日葬多磨
墓域賜誄弔之天下榮之公剛毅闊達清廉愛士功烈益世中外
仰風配三橋氏擧二男二女長義正季忠夫女曰澄子曰正子皆
未成室家

17 山本五十六墓誌（拓本）（昭和18年〈1943〉）

故人の事蹟を後世に伝えるために金石等に記し、墓前に建てる墓碑に対して、墓の中に納めるものを墓誌と呼ぶ。山本五十六墓誌も多磨霊園へ埋葬時に土中に埋められたと考えられ、現在では見ることができないので、貴重な資料と言える。



陸海軍人ニ賜リタル勅諭（案）

朕帝國陸海軍ヲ復員スルニ方リ朕カ腹臨タル陸海軍人ニ告ク

今ヤ時運ニ稽ヘ大ニ收メ兵備ヲ撤セシトス

皇祖考ノ遺訓ヲ思ヒ汝等軍人タル年ノ忠誠ヲ懷ヘハ切ニトモテ胸次ヲ刺ス特ニ敵彈ニ殘レ瘴癘ニ死シタル幾多將兵ノ英靈ニ對シテハ忠心仲恒ニ勝ヘス

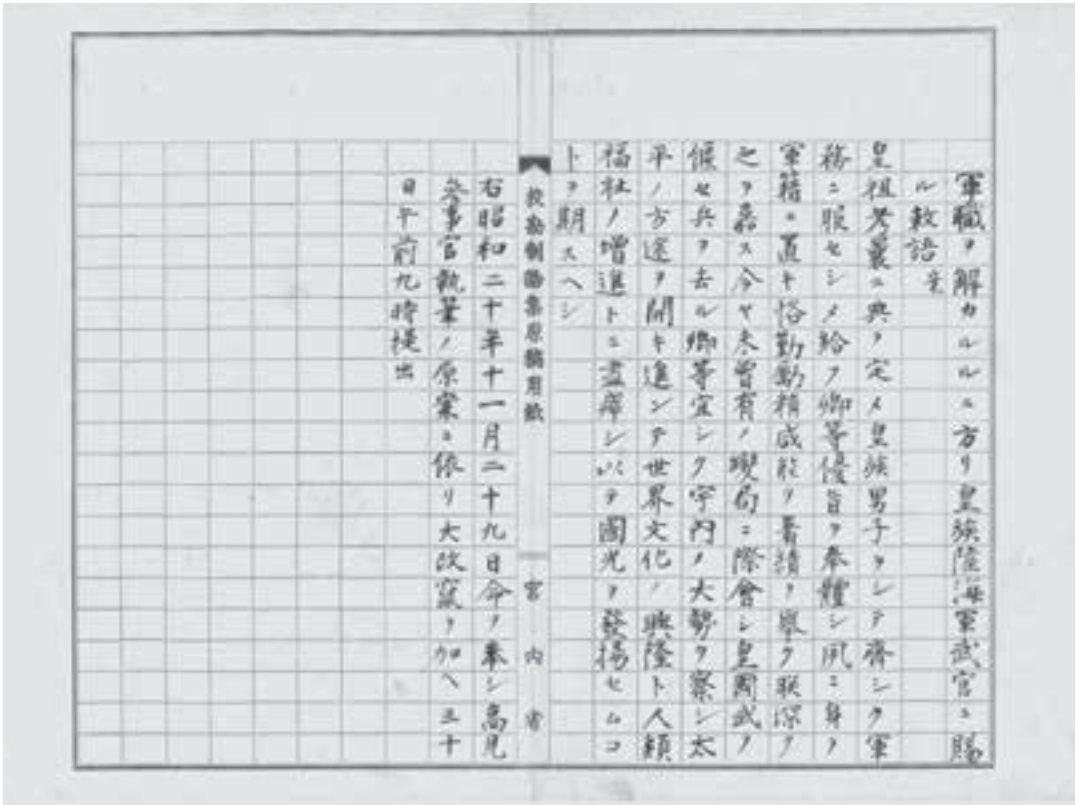
茲ニ兵ヲ解クニ方リ一絲紊レサル統制ノ下整齊迅速ナル復員ヲ實施シ以テ皇軍有終ノ美ヲ濟スハ朕深ク之ヲ庶幾スル所ナリ

汝等軍人堅ク朕カ意ヲ体シ忠良ナル世民トシテ各々其業ニ就キ見有艱苦ニ耐ヘ前途ヲ拓キ以テ戰後復興ニ力ヲ致サムコトヲ期セヨ

右昭和二十年八月二十四日侍從武官府主案

陸海軍省ヲ修正ノ案ニ案ヲ示サルヨウテ朱書ノ如ク改竄ス

八月二十五日朱改ノ如クニテ下賜アラセラレ



軍職ヲ解カルルニ方リ皇族陸海軍武官ニ賜ル勅語案

皇祖考茲ニ典ヲ定メ皇族男子ヲシテ齊シク軍務ニ服セシメ給フ卿等優旨ヲ奉體シ朕ニ身ヲ軍籍ニ置キ恪勤精成能ク業績ヲ擧ク聯深ク之ヲ嘉ス今ヤ本邦有ノ曠局ニ際會シ皇國武ノ振セ兵ヲ去ル卿等宜シク宇内ノ大勢ヲ察シ太平ノ方運ヲ開キ進ンテ世界文化ノ興隆ト人類福祉ノ增進トニ盡瘁シ以テ國光ヲ發揚セムコトヲ期スヘシ

宮内省

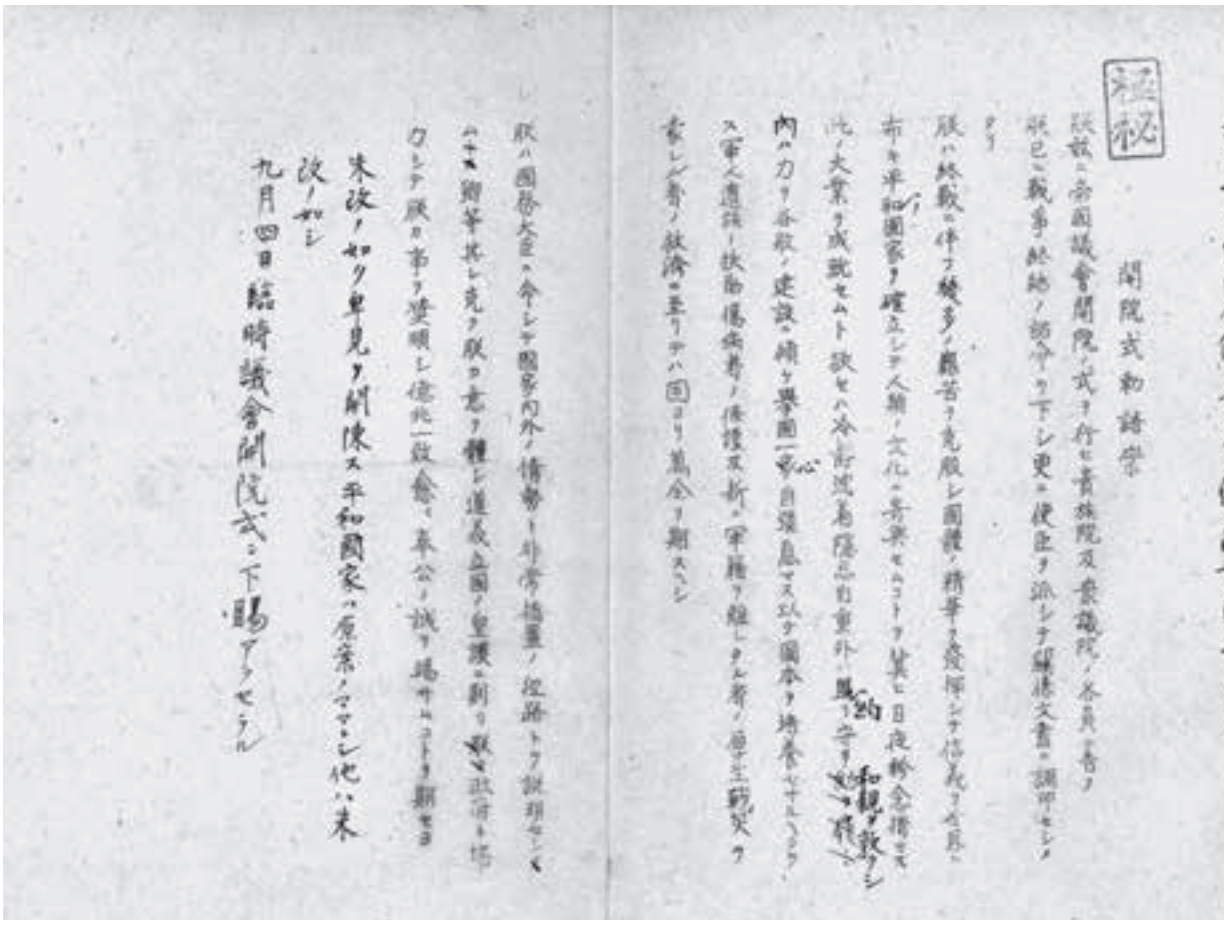
右昭和二十年十一月二十九日命ノ奉シ高見參事官執筆ノ原案ニ依リ大改竄ヲ加ヘ三十日午前九時提出

上段 *18* 陸海軍人ニ賜リタル勅諭（案）（昭和20年〈1945〉8月24日）

昭和20年8月25日に公布された勅諭の草稿。末尾にある通り、同年8月24日に侍従武官府が立案し、陸軍省・海軍省で修正案が示され、8月25日に加藤が訂正したもの。陸海軍人に対し、統制のもの速やかに復員するよう述べているが、「艱苦ニ耐ヘ」「戦後復興ニ力ヲ致サムコトヲ期セヨ」などといった文言は、「終戦の詔勅」を想起させる。

下段 *19* 軍職ヲ解カルルニ方リ皇族陸海軍武官ニ賜ル勅語 案（昭和20年〈1945〉11月29日）

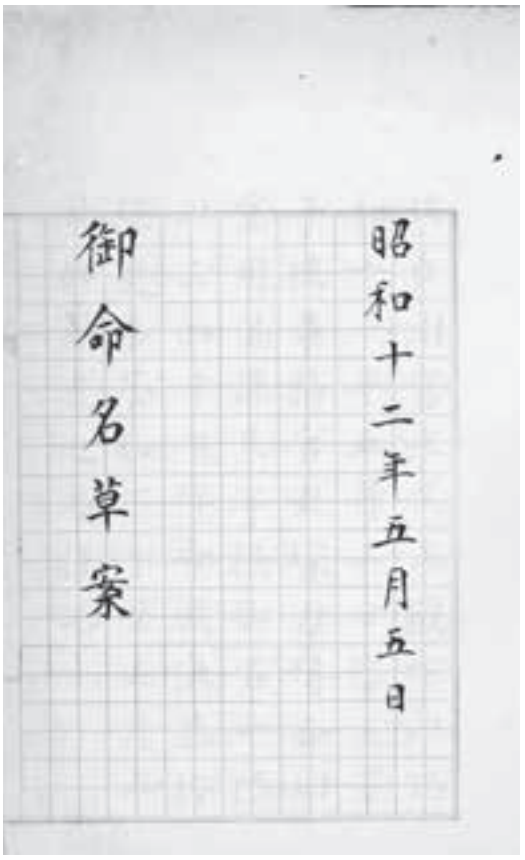
昭和20年11月29日に高見参事官が作成した原案に、加藤が大幅な修正を加えて翌30日午前9時に提出したもの。



上段 *20* 開院式勅語案（昭和20年〈1945〉8月31日）

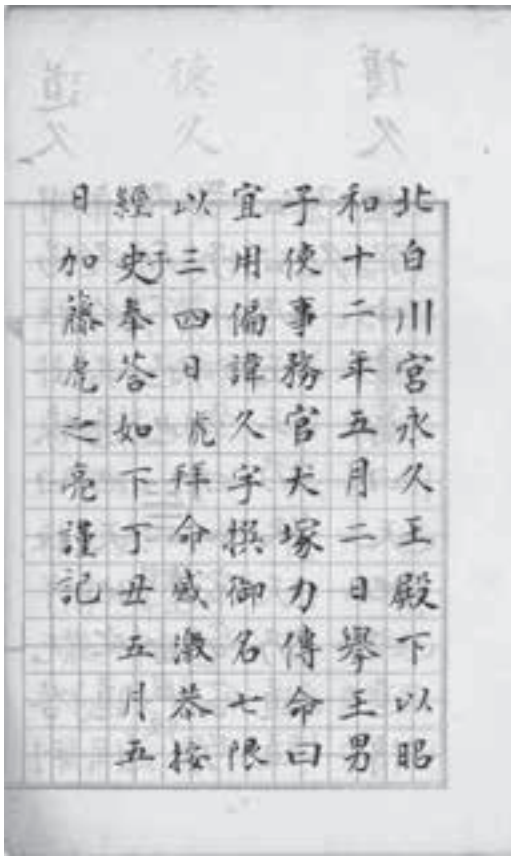
下段 *21* 開院式勅語案（昭和20年〈1945〉9月1日）

昭和20年9月4日に、戦後初めて開かれた帝国議会（第88回）開院式の勅語の草稿。図版20は、同年8月31日に「内閣ヨリ内示セル」案で、「内閣」の用箋を使用した油印版である。図版21は、わら半紙を用いた油印版で、9月1日に宮内次官・主管が合議した結果をうけて上掲の第3案を大幅に削除して作成された文章に、さらに加藤が朱を入れたもの。「陸海軍人ニ賜リタル勅諭」同様、「終戦の詔勅」を想起させる文言が見られる。



昭和十二年五月五日

御命名草案



親久　徳久　道久

北白川宮永久王殿下以昭和十二年五月二日擧王男子使事務官大塚力傳命曰宜用偏諱久字撰御名七限以三四日虎拜命感激恭按經史奉答如下丁丑五月五日　加藤虎之亮謹記

道久

周易恒卦彖曰恒亨无咎利貞久於其道也天地之道恒久而不已也☳☴巽下震上雷風恒

老子十六章曰知常容容乃公公乃王王乃天天乃道道乃久

博久

禮記中庸篇曰天地之道博也厚也高也明也悠也久也

徳久

忠經政理章第七曰刑則在省而中政則在簡而能徳則在博而久

周易繫辭上傳曰乾道成男坤道成女乾知大始坤作成物乾以易知坤以簡能易則

22 御命名草案（昭和12年〈1937〉5月5日）

昭和12年5月2日に誕生した、北白川宮道久王の「御命名草案」。加藤は、出生にあたって名前を合計7種類（道久・博久・徳久・親久・安久・信久・威久）作成し、その典拠を示している。出生した皇族の命名がいかに行われたかを知ることができる、貴重な資料である。加藤は、道久王の父で、昭和15年（1940）9月4日に飛行機事故で薨去した、北白川永久王の碑文、尊像記、墓誌銘も起草している。

易知簡則易從易知則有親
易從則有功有親則可久有
功則可大可久則賢人之德
可大則賢人之業易簡而天
下之理得矣
前項忠經參看

親久
前項參看

安久
禮記樂記曰君子曰禮樂不
可斯須去身致樂以治心則
易直子諒之心油然生矣易
直子諒之心生則樂樂則安
安則久久則天天則神天則
不言而信神則不怒而威致
樂以治心者也

信久
前項參看

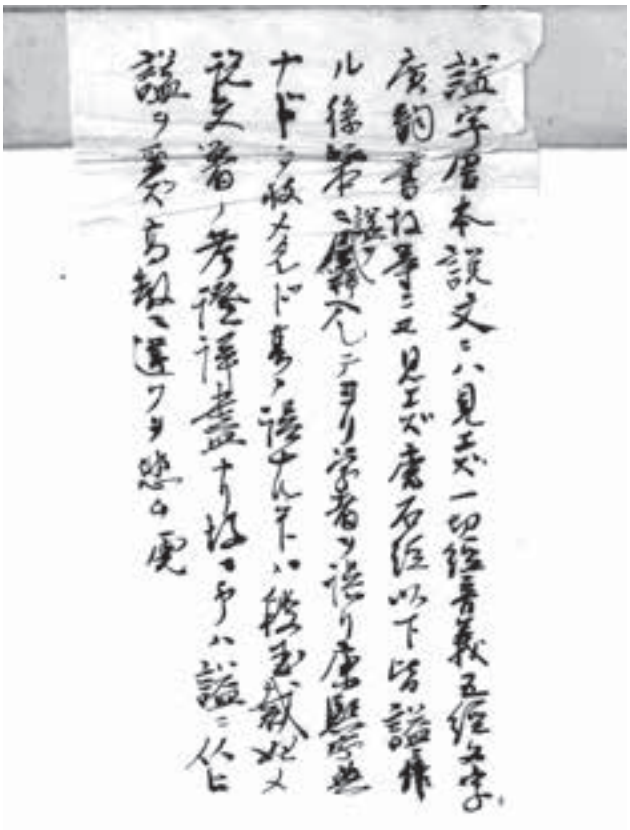
威久
同前

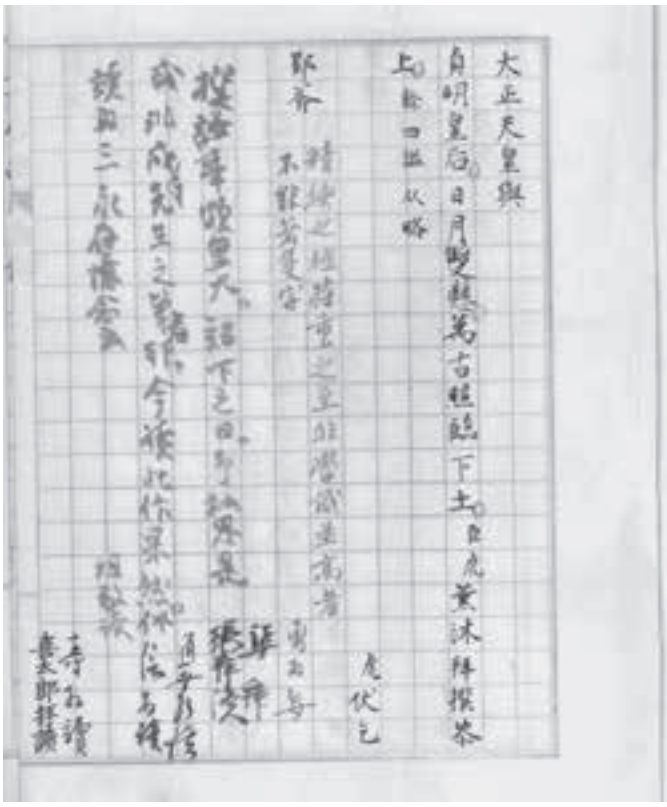
越八日早天塚事務官傳命
曰命名既定上午十一點半
參殿為殿下講出典乃進講
道久之典正午退下與諸員
陪侍賜餐筵下午二點終晞

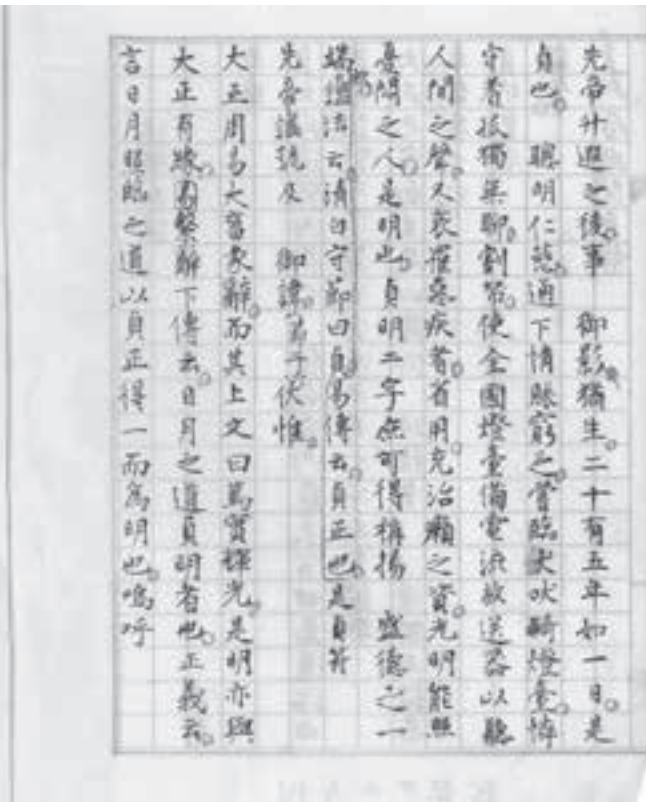
六點有台使就家分賜九重
所賜交魚鯉鱧二姬鯛二海
老一又賜御有料五千疋不
堪感激恭追記以志欣幸云
爾五月八日夜三更
七月九日賜木杯壹箇鶴子
鉾紅白各壹箇十日參殿御

恩命之辱嗚呼王家隆恩一
至于此感泣不知所言五月
十日夜十二點半 尼謹誌

22 御命名草案（続き）

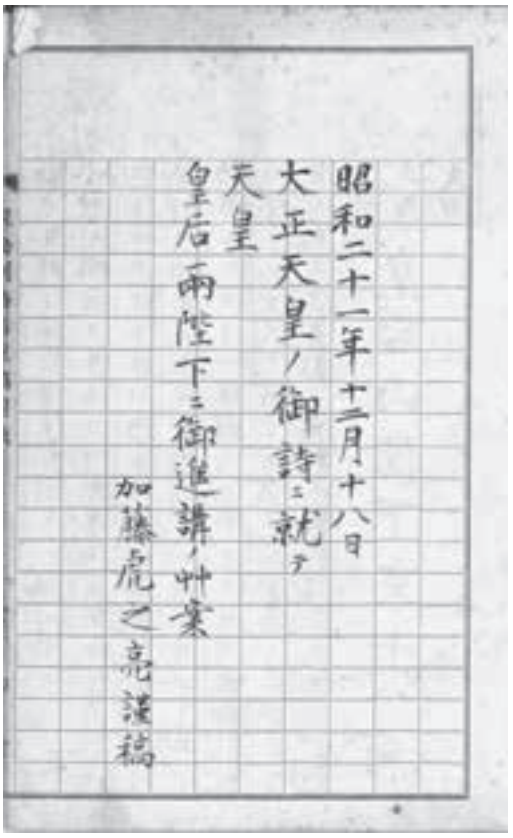






23 追号私議（昭和26年〈1951〉）

加藤は、昭和 26 年 5 月 17 日に薨去した皇太后の諡号を起草した。出典として、『易経』の一文「日月之道貞明者也」から採られた。添削者に、山田準らの名前が見える。同年 6 月 8 日に、貞明皇后と追号され、22 日に「大喪の儀」が行なわれた。なお、加藤は諡を起草するにあたって、中国歴代王朝の皇后の諡が記した「漢土歴朝皇后追諡」を作成して参考資料としている。「諡」か「謚」かいずれの字体を用いるべきかについても、加藤は中国古典学者らしい見識を披瀝している（図版上段左）。



昭和二十一年十二月十八日

大正天皇ノ御詩ニ就テ

天皇

皇后兩陛下ニ御進講ノ草案

加藤虎之亮謹稿

大正天皇ノ御詩ニ就テ

大正天皇ノ御詩ニ就テ御進講申上ゲマスル様
思命ヲ拜シ、感慨感激ノ至ニ堪ヘマセヌ。淺陋ノ
身ヲ以テ先帝様ノ御詩ヲ謹仰致シマスルコト
ハ、畏クも天ヲ親フニ等シク、聖意ヲ一端ダモ
拜察スルコトハ困難デアリマスル。又御時間ノ
關係モ御座リマセレテ、謹仰ノ一部ヲ申上ゲルコ
トヤマセヌコトハ恐キイ事ニ存シマセレテ、特ニ
御許ヲ御願ヒ申上ゲル次第デコザイマスル。
順序ト致シマシテ、先ヅ詩ノ一般ニ就テ申上ゲ、

一

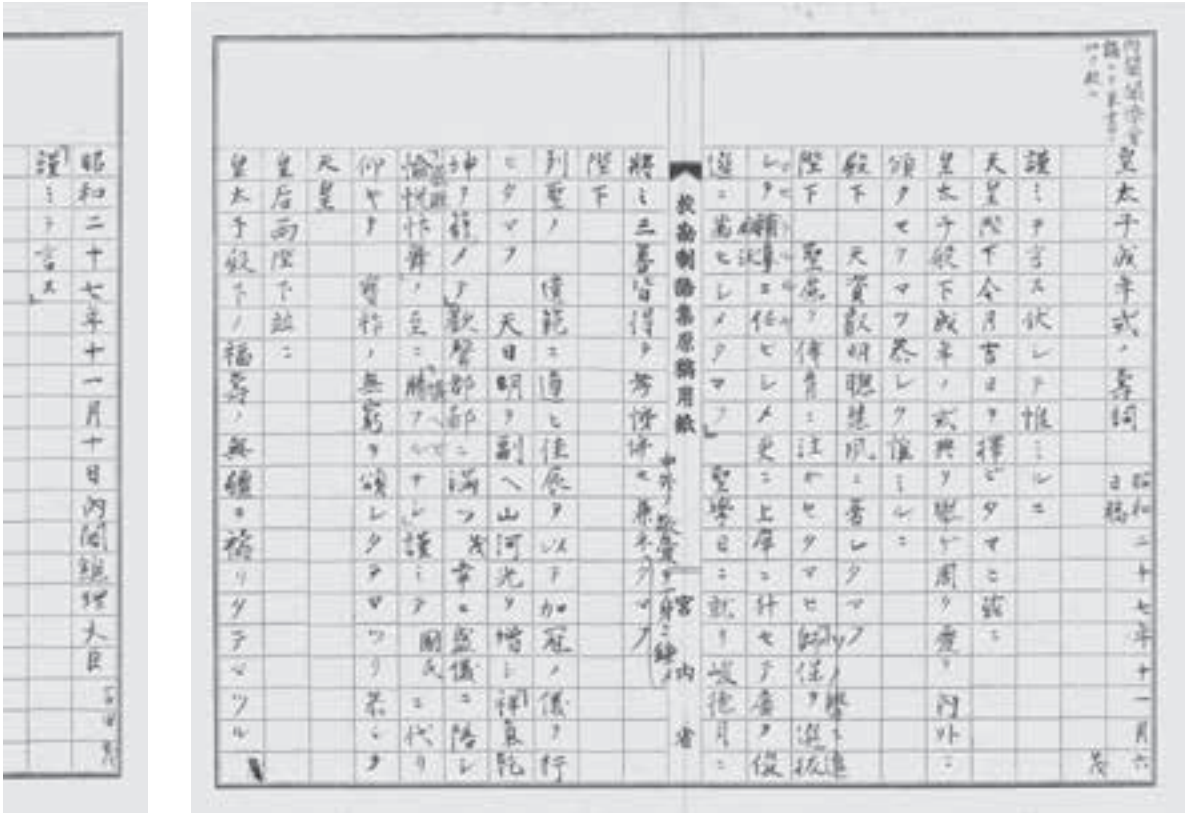
吹ニ御詩ニ就テ申上ゲマセテ頂キタク思ヒマ
スル。詩トハ如何ナル者カト申シマスルト御
前ニ奉呈致シマシタル印刷物ノ一ツ御覧願ニ
ナリ度シマスル。

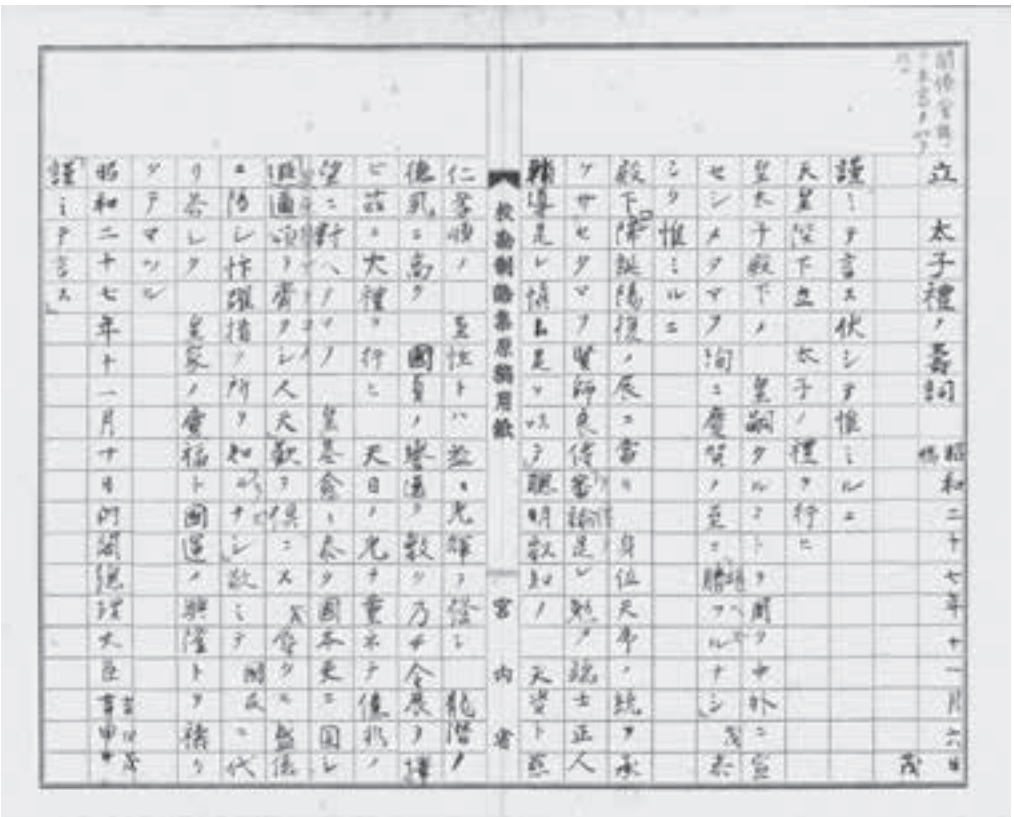
詩者志之所之也在心為志發言為詩情動於中而
形於言言之不足故嗟歎之嗟歎之不足故永歌之
永歌之不足不知手之舞之足之蹈之也情發於聲
聲成文謂之音治世之音安以樂其政和亂世之音
怨以怒其政乖亡國之音哀以思其民困歌正得失
動天地感鬼神莫近於詩先王以是經夫婦成孝敬

倫美教化移風俗詩ハ志ガ詞ニ見ハレタ者デアリマ
即チ詩ハ志ガ詞ニ見ハレタ者デアリマ
ノ刺戟ヲ受ケテ喜怒哀樂愛惡欲ノ七情ガ心ニ
起リマスルト、ソレガ詞ニ見ハレマスル。聲音ノ
詞ガハ見ハセナイ時ハ歌ヒマスル。ソレデモ見ハセナイ時ハ、聲ヲ
トメ時ハ歌ヒマスル。即チ音ガ音ヲ出シ、足ガ拍子ヲ取レ、振ヲ
ヒ出シ、足ガ拍子ヲ取レ、振ヲ
リマスル。即チ音ガ音ヲ出シ、足ガ拍子ヲ取レ、振ヲ
レマスル。即チ音ガ音ヲ出シ、足ガ拍子ヲ取レ、振ヲ
詠歌ニ到ルト、聲ガ通ノ詞ハ着種ノ聲デ走リマスル。
ルト聲ガリマスル。音ガネハナリマ

24 御進講草案（昭和21年〈1946〉12月18日）

天皇皇后に対して行われた、大正天皇の漢詩に関する御進講の草案。文章は漢字片仮名交じりの口語体で記され、侍従長大金益次郎の書翰が綴じてある。なお、『大正天皇御製詩集』は、昭和10年（1935）に木下彪が草稿整理の嘱託となり編纂が開始された。加藤は昭和19年（1944）4月に参与を命ぜられ、昭和20年（1945）10月に編纂が終了している。

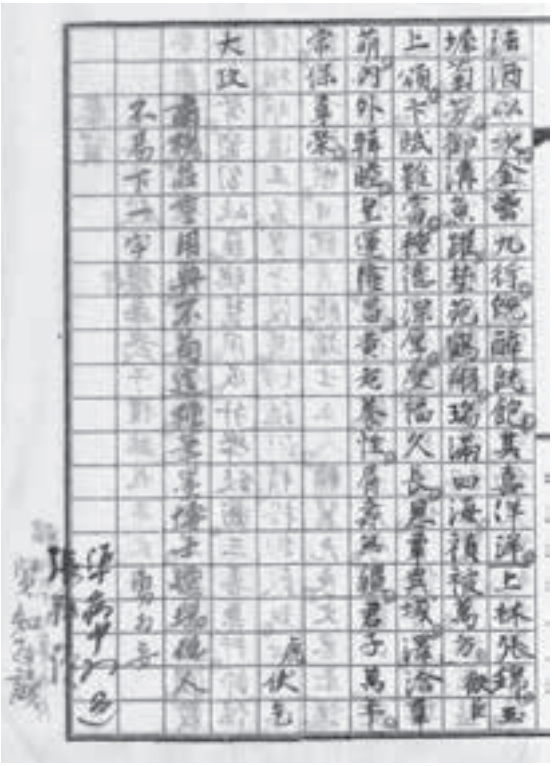




上段 *25* 皇太子成年式ノ寿詞（昭和27年〈1952〉11月6日稿）

下段 *26* 立太子礼ノ寿詞（昭和27年〈1952〉11月6日稿）

昭和27年11月10日に行われた、皇太子（今上天皇）成年式および立太子礼に際して、内閣総理大臣（当時）吉田茂が読み上げた寿詞の草稿。「内閣閣僚会議ニテ朱書ノ如ク改ム」とあるように、加藤が起草した文章に朱で修正が加えられている。

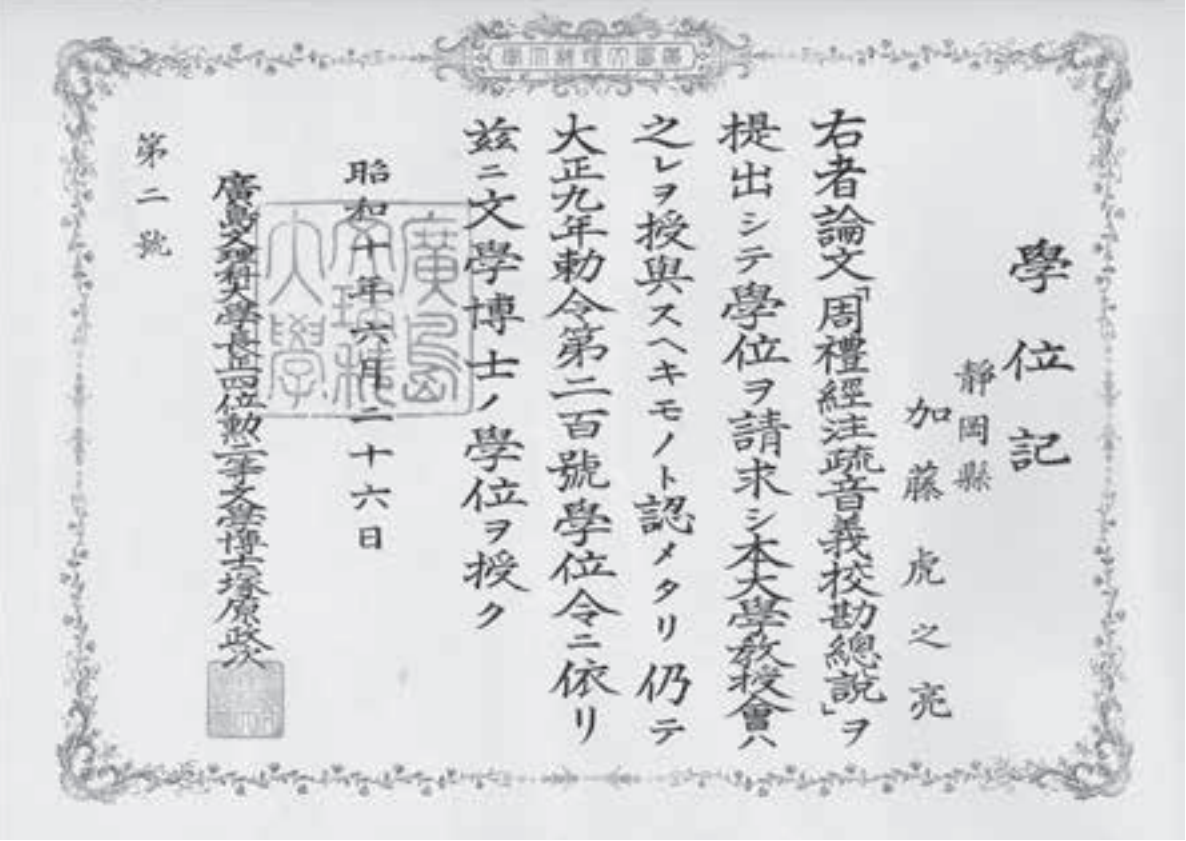


上段右上 *27* 皇太子殿下ノ御詞（案）（昭和27年〈1952〉11月1日稿）

資料26「立太子礼ノ寿詞」（内閣総理大臣吉田茂）に対する、皇太子（今上天皇）のお言葉。「宮内庁長官秘書課長等協議ノ結果朱書ノ如クス」とあるように、加藤が起草した文章に朱で修正が加えられている。

上段左上 *28* 奉賀皇太子殿下挙行立太子礼并成年式典（昭和27年〈1952〉10月）

皇太子（今上天皇）の立太子礼および成年式を記念して、加藤が作った漢詩。山田準・上野賢知らの批が見える。



學位記

静岡縣
加藤虎之亮

右者論文「周禮經注疏音義校勘總說」ヲ
提出シテ學位ヲ請求シ本大學教授會ハ
之レヲ授與スヘキモノト認メタリ仍テ
大正九年勅令第二百號學位令ニ依リ
茲ニ文學博士ノ學位ヲ授ク

昭和十年六月二十六日

廣島文理科大學長正四位勲二等文學博士塚原政次

第二號

周禮經注疏音義校勘記卷第一

周禮經注疏音義校勘記卷

上段 29 学位記（広島文理科大学、昭和10年〈1935〉6月26日）

下段 30 『周礼経注疏音義校勘記』原稿（昭和32年〈1957〉刊行）

加藤は広島文理科大学に、博士論文として「周礼経注疏音義校勘総説」を提出し、文学博士の学位を取得した。今回寄託された資料のなかには、加藤が論文提出に先立ち提出した学位申請書なども含まれる。図版 30 は、『周礼経注疏音義校勘記』の刊行助成金を文部省に申請するために作成された、同書巻頭の見本原稿（油印本）である。

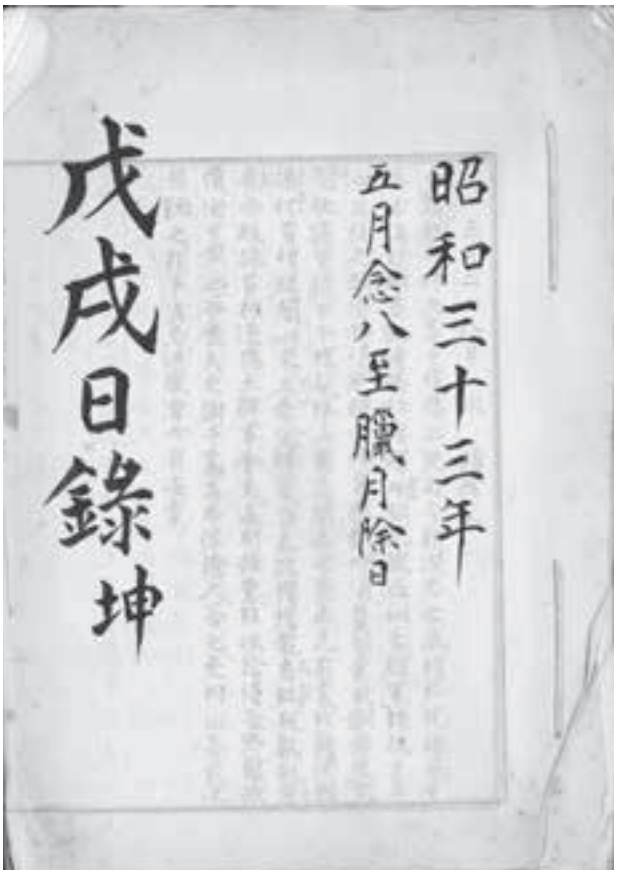
上　段 *31* 紫綬褒章の記（昭和33年〈1958〉11月3日）

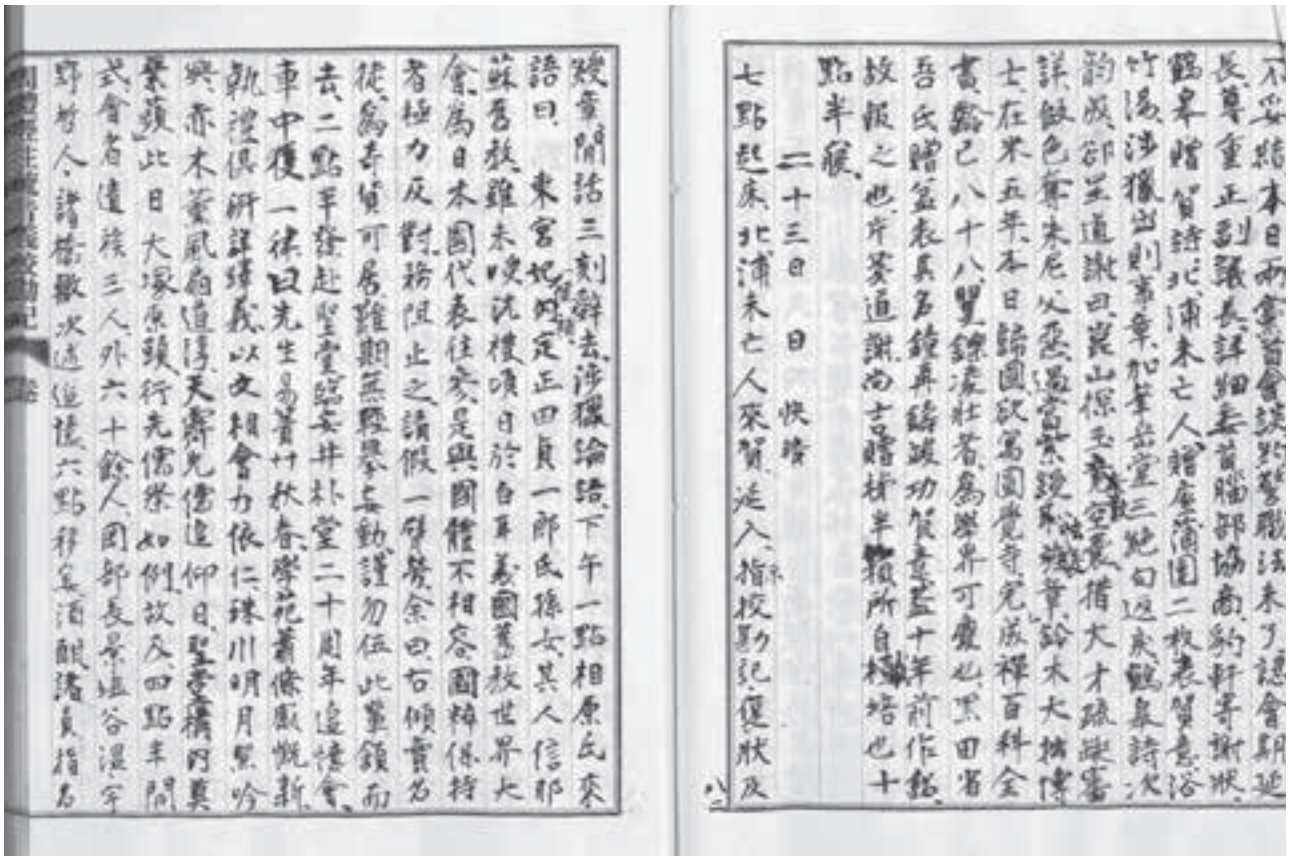
下段右 *32* 二松學舍専門学校辞令（昭和4年〈1929〉4月1日）

加藤は、二松學舍専門学校に昭和４年４月から昭和９年３月まで出講した。

下段左 *33* 判定書（昭和21年〈1946〉7月29日）

GHQ 占領下、全ての教育関係者は戦中の活動に対する審査を受けて適格判定を受けなければ公職に就くことができなかった。大学においては学内に審査委員会を設置して審査が行われ、二松學舍専門学校などは地域に設置された審査委員会で審査された。





34 日記（昭和33年〈1958〉11月）

加藤は日々のニュースや出来事などを漢文の日記で記している。明治・大正期のものは断片的で、昭和 29 年から 33 年までのものが纏まっている。図版掲載箇所の、昭和 33 年（1958）11 月 23 日および 27 日には、皇太子妃（皇后）内定の記事が見える。日記は、加藤が亡くなった同年 12 月 2 日の午前中で終わっている。

二十六日　水　晴陰交

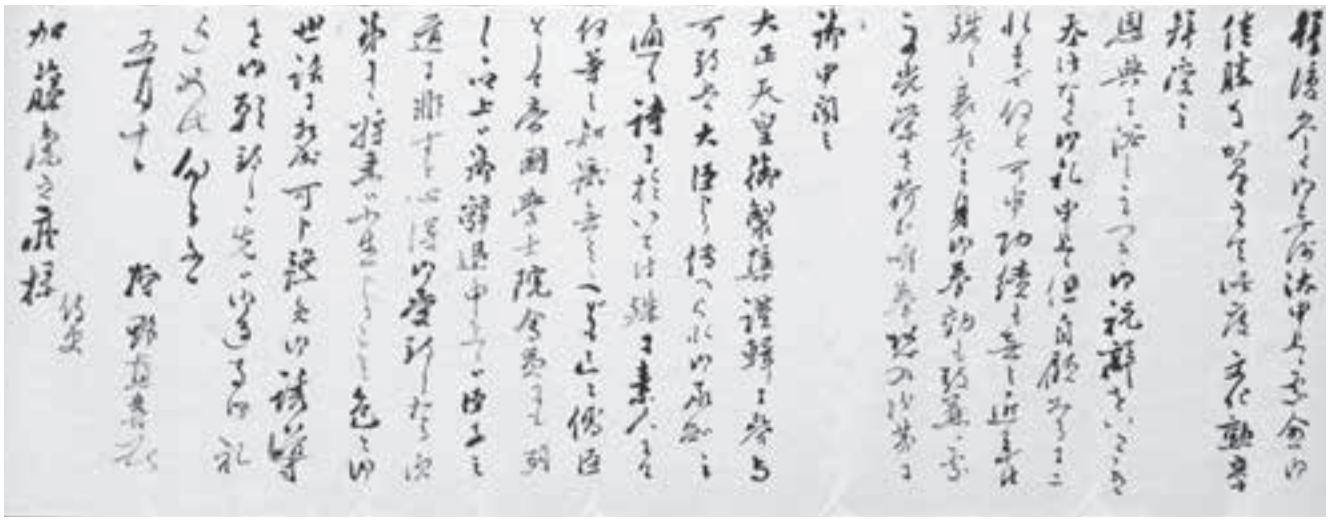
七點起床、爲聖社詩稿正午發到四谷車站、應車不來、拾車二點參內、事務官謝不敢同十分遲請侍醫巴調、樞宮殿勤宣授勳記嘉納之旨、謹罪賀明日開會　東宮妃選定皇族會議、并言上民間有熱意、將退女官長曰、姑待爾來御圖載培十種蔬菜大籠、樹大林檎一籠、名菓一包、曰、賜之、前二步、拜謝優恩、歸車送到家時四點半、賜案狀及綾章、召覽、招宮崎夫人、示恩賜品、到其一部、獻八幡宮、夫人感激久之、夜示松田生、亦頌福、生亦感銘不堪、十點強寢

二十七日　木　晴後陰

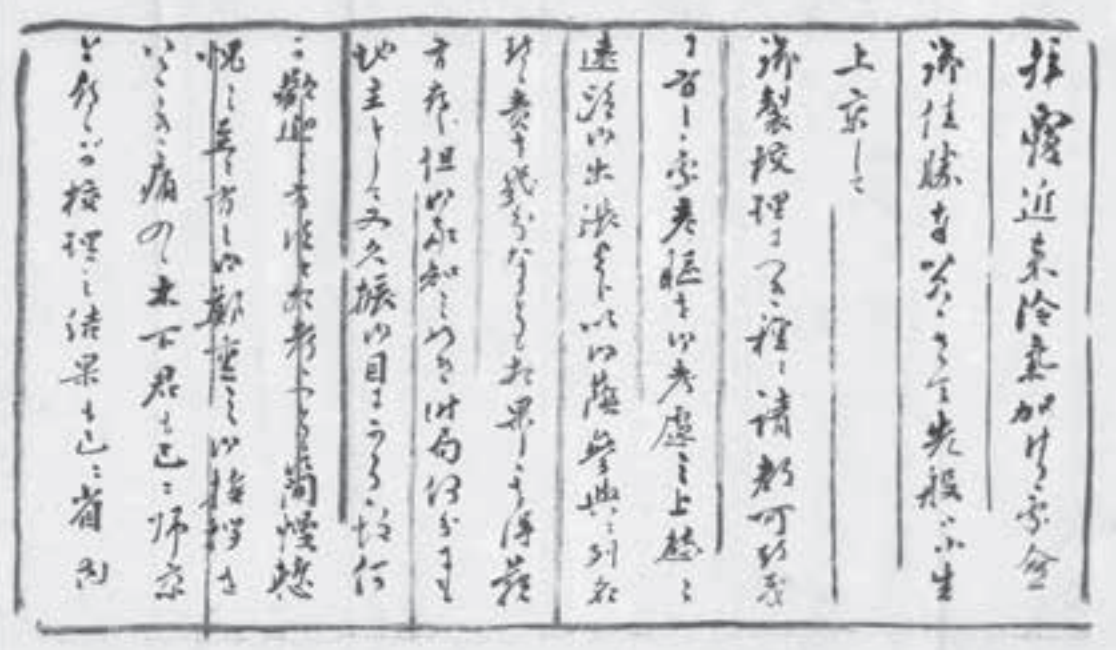
六點半起床、稱謝恩二絶曰、珍蔬佳菓滿筐籃、光彩陸離香暗含、禁園載培天上味、寒衙生色龍恩覃、紅林林檎籠上堆、秋光璀璨似瓊瑰、菊章銘菓恭兼賜、感激老臣雙淚頹、上午十點宮中開皇族會議、秋父宮妃、高松宮、岸首相、增島稚熊、黑田正副長、議松野、參院同上、田中、最高裁判事宇佐美宮內長官、參列、同四十二分畢、全員一致、決兩陛下且銓衡　東宮妃、全員一致、決正田英三郎長女美智子報　東宮及正田家、美智子、爲雙業及聖心女學院出身、且頃日爲日本代表列於白國世界聖心學院總會人、或危與祭政一致國體、無阻格、百方奔走、祈其行動不逸常規、惇爾前贈七律賀、授章且賀下奏、刊刻贈二千五百圓、禮意殷勤、不勝深謝、次韻詩成、曰、學界無邊守一疆、藉期變開試宣揚、周官文字委榛莽、姬旦經綸暗典常、鄭注欲明重世謬、賈疏詞苑開無傳、後勤家庭慎訓徽、光恩功勞文化苦、雅衷、畫錦鮮明孝順村、育英青學鮮舊塵、終生積學答清明、白頭歸展奏榮典、紅樹喜迎輝素誠、功遂爛論文化賞、名成搖寬藝林聲、墳前稱謁日將落、啞啞烏啼不耐情、佛國總選舉土、鄭兒派獲大捷、從來第一黨、共產黨、僅爲十名、實十之一、蓋記員五之一、新出五之四、佛之政治自今一變、比律賓大統領、賴氏來朝、兩陛下迎羽田空港、待以國賓十點五十廢、七日開出版經營會、電話交換、小倉內藤宇野父子、應話、河井氏歸鄉不得會

二日　火　快晴

六點三刻起床、電話清田氏、諾經營會場、不決、約今夕重勸議



加藤虎之亮宛書簡



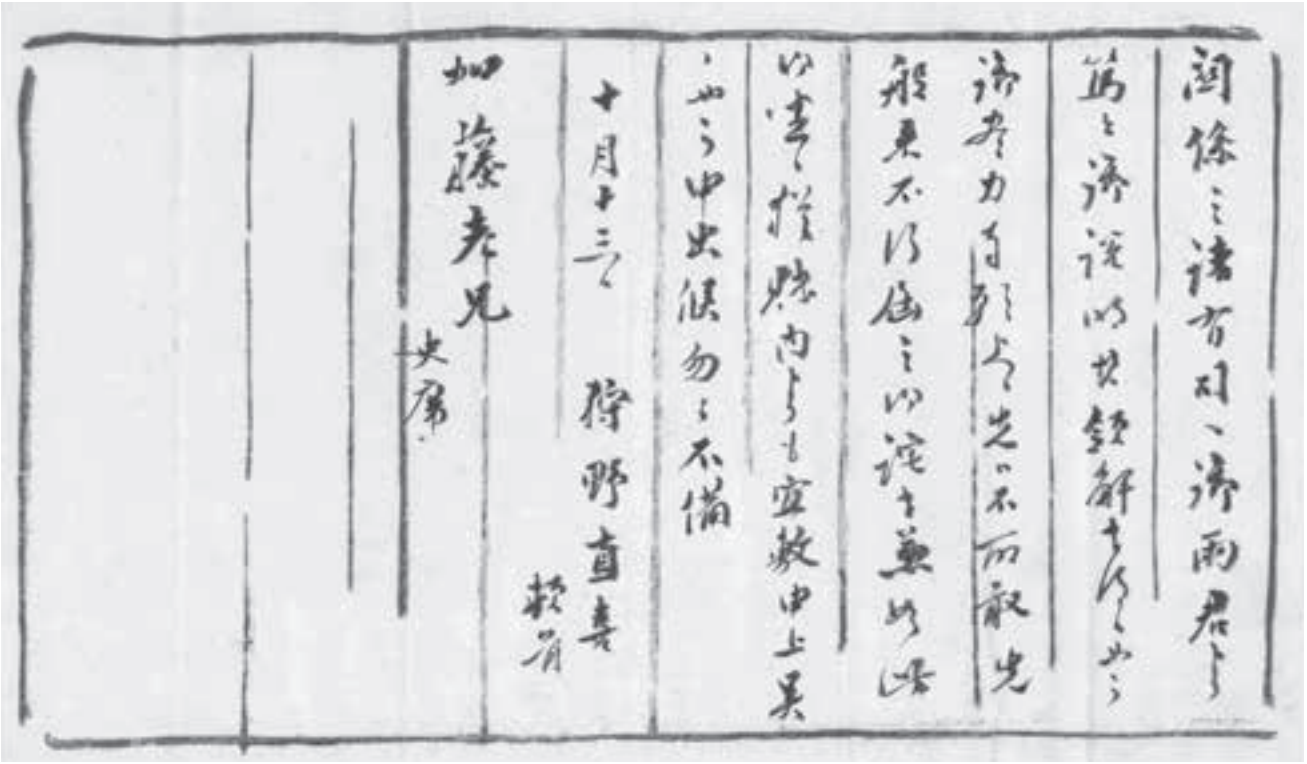
上段　35　狩野直喜書簡（昭和19年〈1944〉5月10日付、加藤虎之亮宛）

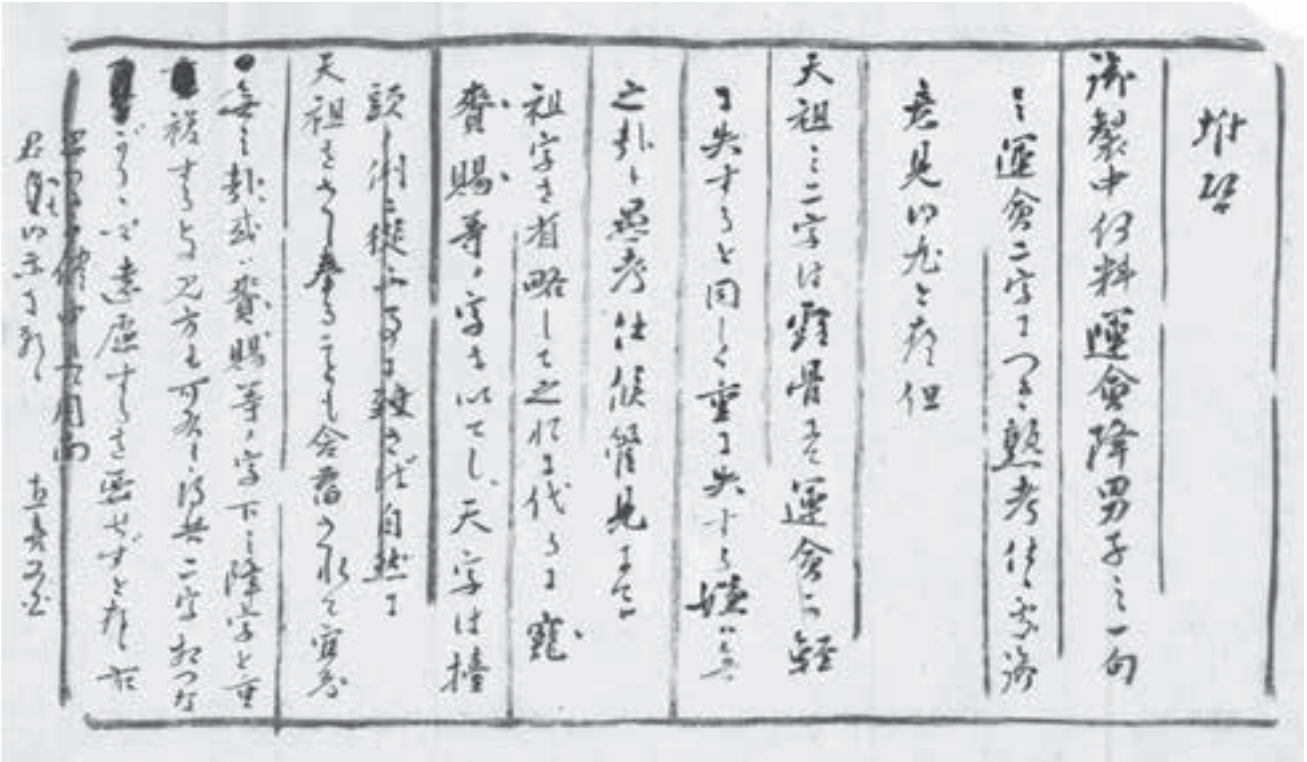
『大正天皇御製詩集』の編纂は、長くその任にあった木下彪（1902 ～ 99）によれば、落合為誠の侍従時代に着手し、昭和 12・13・14・18 年の四次に亘る作業を経て、昭和 19 年 3 月から刊行準備が進められた。加藤虎之亮と木下彪が編纂員となり、宮内省幹部が審議員、京都の狩野直喜（1868 ～ 1947）と鈴木虎雄（1878 ～ 1963）が参与として参加した。本書簡は、狩野が編纂事業の参与として参加することを承諾した時のもの。

（翻字）「拝復、久しく御無沙汰申上候處、愈御佳勝奉賀候。さて文化勲章拝受之恩典に浴し候につき御祝辭をいたゝき忝けなく御礼申上候。但自顧みるにこれまで何と可申功績も無之、近年は殊に衰老之身御奉効も致兼候處、この光栄を荷ひ唯奉恐の次第に候。御申聞之大正天皇御製集謹輯に參与可致旨大臣より傳へられ、御承知之通り詩に於いては殊に素人にて何等之知識無之候へども、已ニ儒臣として帝國學士院會員にも列し候以上、御辭退申上候ハ臣子之道に非すと心得、御受致したる次第に候。将来ハ小生よりこそ色々御世話に相成可申、豫め御誘導を御願致し候。先ハ御返事御礼迠如此匆々不一。五月十日　狩野直喜頓首　加藤虎之亮様侍史」

下段　36　狩野直喜書簡（昭和19年〈1944〉10月13日付、加藤虎之亮宛）

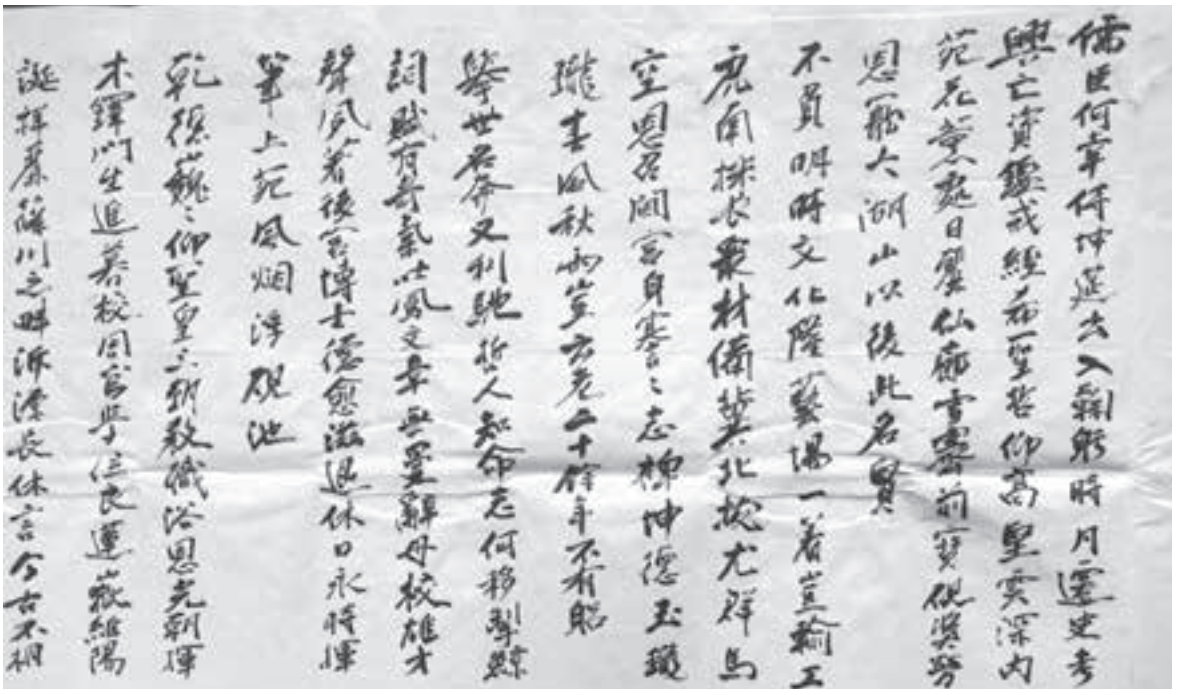
高齢で参与となった狩野の意見を徴するために加藤・木下彪ら編纂員が京都まで出張した時の書簡。追伸の内容から、狩野と加藤の間で校訂に関する実質的な意見交換があったことがわかる。当該の詩は、明治 34 年 4 月 29 日の皇孫誕生（昭和天皇）に詠じられた七律「皇后宮台臨恭賦」を指し、刊本では当該箇所「何料運會降男子」は「何幸天賚降男子」に改められ、「天祖」の表現も書き換えられている。

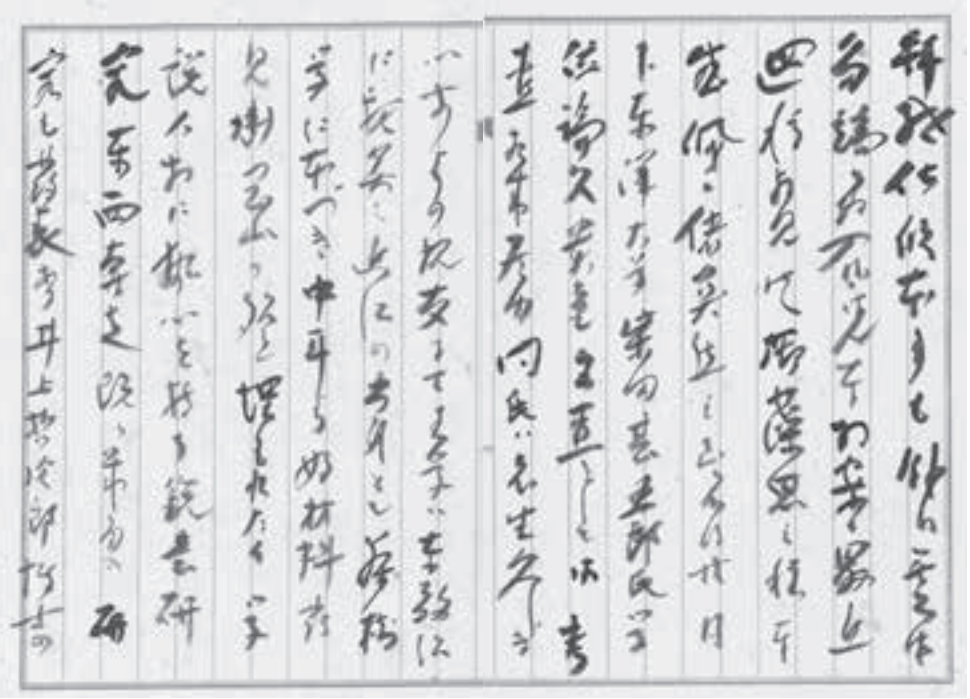




(翻字)「拝覆、近来冷氣加はり候處、愈御佳勝奉賀候。さて先般ハ小生上京して、御製校理につき種々請教可致義に有之候處、老軀を御考慮之上、態々遠路御出張被下、以御蔭參與ニ列名致候責を幾分なりとも相果し候を得、難有存候。但御承知之如き時局、何分にも地主として又久振御目にかゝり候故、何か歡迎之方法と相考候へとも、簡慢慙愧之至ニ有之、御鄭重之御挨拶をいたゝき痛入候。木下君も已ニ帰京と存候が、校理之結果も已ニ省内關係之諸有司へ御兩君より篤と御説明、其領解を得候やう御尽力奉願上候。先ハ不取敢先般来不行屆之御詫を兼、如此御坐候。猶賤内よりも宜敷申上呉候やう申出候。匆々不備。十月十三日　狩野直喜　頓首　加藤老兄　史席

坿啓、御製中、何料運會降男子之一句之運會二字につき熟考仕候處、意見御尤と存候。但、天祖之二字は露骨にて、運會か軽に失すると同しく、重に失する嫌ハ無之哉と愚考仕候。管見にてハ、祖字を省略して之れに代るに寵賚賜等ノ字を以てし、天字は擡頭ノ例ニ從ふ事に致さば、自然に天祖をさし奉ることも含蓄されて宜敷無之哉。或ハ賚賜等ノ字、下之降字と重複するとの見方も可有之候得共、相つながり候間、遠慮するを要せずと存候。右思つきの侭申上候。周南君へも御示奉願候。直喜又白。」

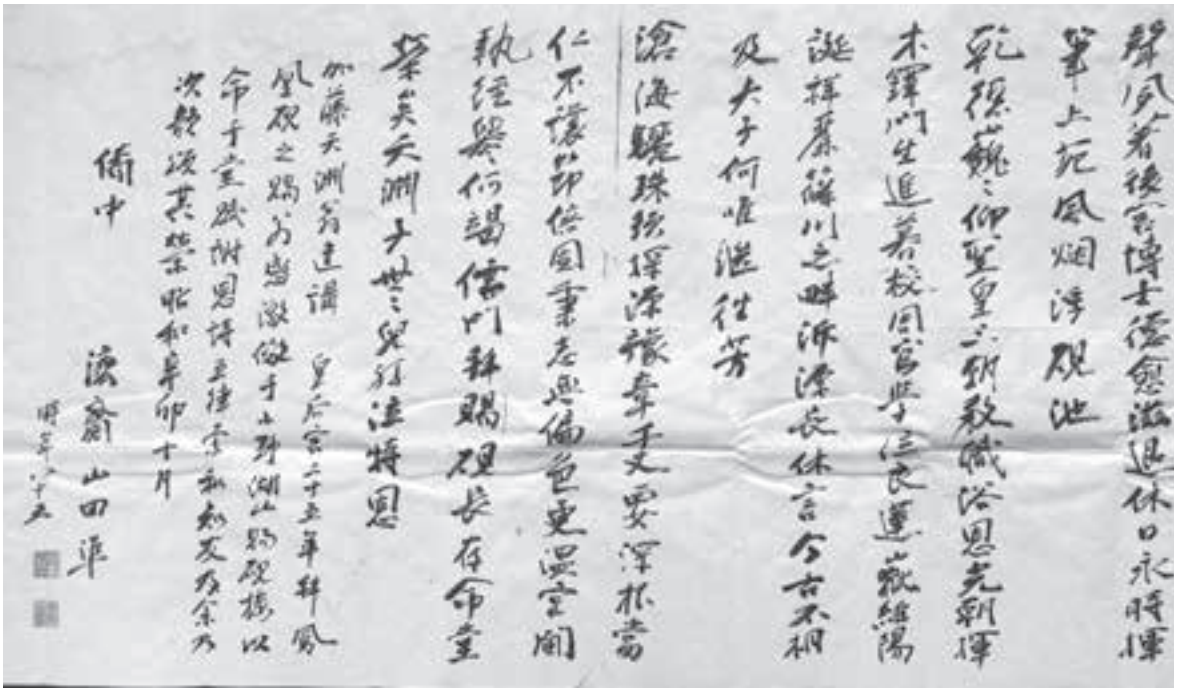


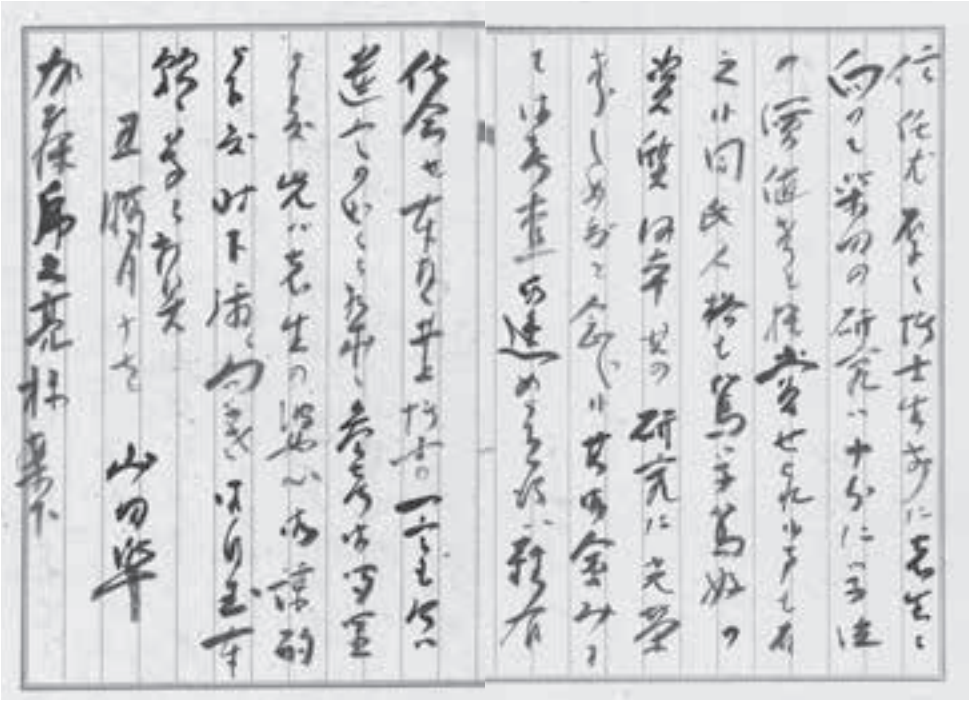


上段 37 山田準「賀章」（昭和26年〈1951〉10月）

二松學舍専門学校に出講した加藤と初代校長山田準との交流は、山田が昭和 18 年に高梁に帰隠した後も続いた。昭和 26 年に香淳皇后への進講が 25 年に達したのを記念して、皇室から「鳳凰硯」が贈られた時、加藤は明治期に小野湖山が皇室から硯を賜った時に「賜研楼」と号したのに倣って書斎に命名し、また律詩を作って謝意を表した。その律詩を贈られた山田は、早速、次韻してその名誉と学徳を頌え、労苦をねぎらった。

（翻字）「儒臣何幸侍坤筵 出入鞠躬時月遷 史考興亡資鑑戒 經希聖哲仰高堅 雲深内苑花薫處 日麗仙廊雪霽前 寶硯獎勞恩寵大 湖山以後此名賢。　不負明時文化隆 藝場一着豈輸工 虎南採長衆材備 冀北拔尤群馬空 恩召闈宮身謇謇 志裨坤徳玉瓏瓏 春風秋雨豈云老 二十餘年不有貂。　擧世名奔又利馳 哲人知命志何移 掣鯨詞賦有奇氣 吐鳳文章無疊辭 母校雄才聲夙著 後宮博士徳愈滋 退休日永時揮筆 上苑風烟浮硯池。　乾徳巍々仰聖皇 三朝教職浴恩光 朝揮木鐸門生進 暮校周官學位良 蓮嶽維陽誕祥麗 篠川之畔泝源長 休言今古不相及 夫子何唯繼往芳。　蒼海驪珠須探源 豫章千文要深朴 當仁不讓節倍固 秉志無偏色更漫 宮闈執経譽何竭 儒門拜賜硯長存 命堂榮矣天淵子 世々兒孫泣特恩。　加藤天淵翁進講皇后宮二十五年、拜鳳凰硯之賜。翁感激、倣于小野湖山賜硯楼以命于室、賦謝恩詩五律、索和知友及余、乃次韻頌其榮。　昭和辛卯十月 備中濟斎山田準 時年八十五」

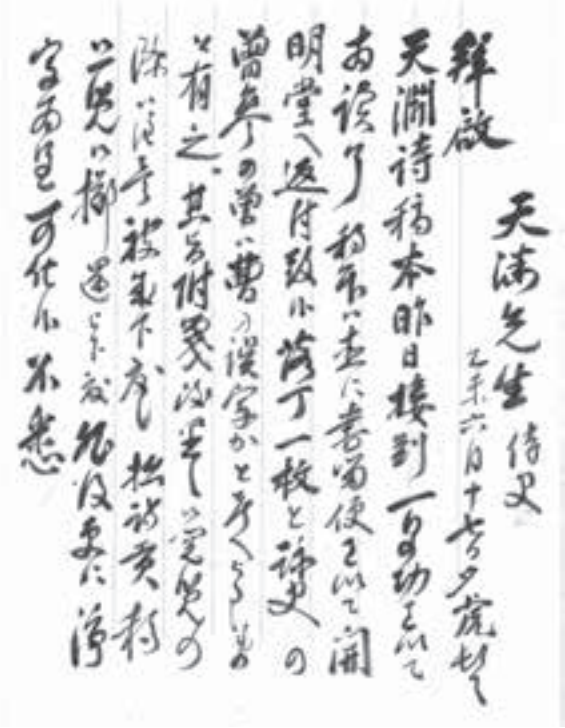




下段　*38*　山田準書簡（加藤虎之亮宛、昭和24年〈1949〉12月17日）

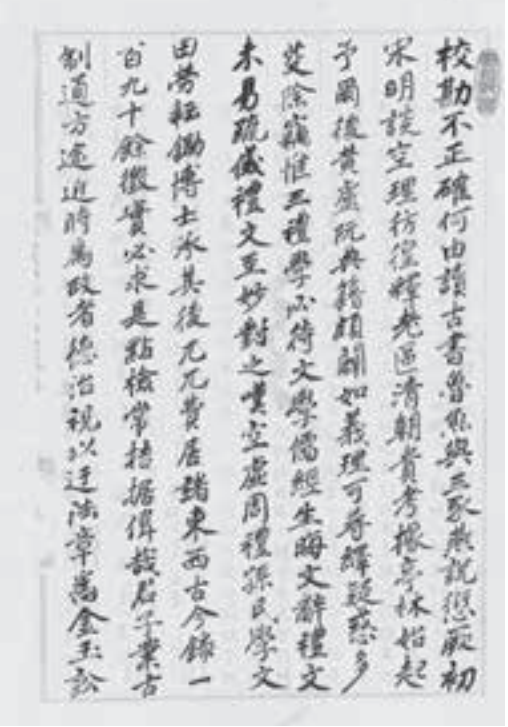
陽明学研究者として知られる柴田甚五郎の学位論文審査を加藤が担当していると知った山田から、陽明学は専門ではない加藤に対して、山田が柴田の人物識見を紹介した書簡。柴田は東敬治門下で井上哲次郎の信任篤く、淵岡山研究の開拓者であると述べている。山田の陽明学研究の先達としての存在をよく示す。

「拝啓仕候。本年も餘日無之御多端被為入候はん奉拝察候。最近廻稿拝見仕候。御藻思之程奉感佩候。偖突然之至ニ候得共、目下東洋大学柴田甚五郎氏学位論文、貴臺審査として御考査相成居候由、同氏ハ老生久しき以前よりの親友にて、王学ハ東敬治に親炙し、近江の出身とて藤樹学に本づき中年より好材料發見、淵岡山か殆と埋もれたる学説人物に執心を持ち鋭意研究、東西奔走、既ニ幾多の研究も發表あり、井上哲次郎博士の信任尤厚く、博士生前に老生ニ向つて柴田の研究ハ十分に学位の價値ありと推賞せられ候事も有之候。同氏人格も篤学篤好の資質、何卒其の研究に光榮あらしめ度と念じ候。其御含みにて御考査御進め被下候得ハ難有仕合せ奉存候。井上博士の一言も今ハ遺言の如くニ相成候。参考御聞置被下度、先ハ老生の婆心御諒酌被下度、時下漸々向間寒御自玉奉願候。草々拝具。　丑臘月十七日　山田準　加藤虎之亮様案下」



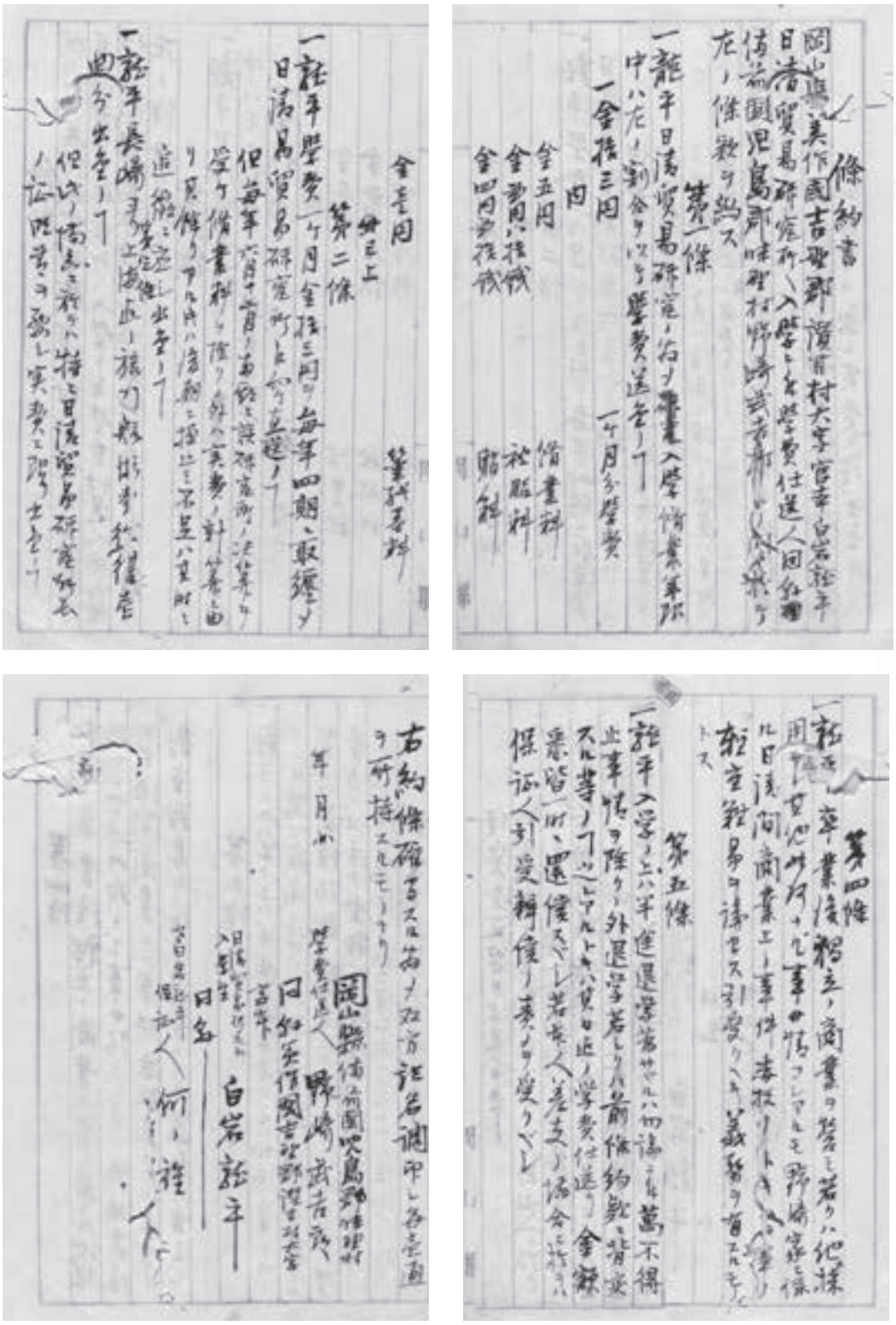
39 鈴木虎雄書簡（昭和30年〈1955〉6月17日）

加藤から『天淵詩』稿本を送られた鈴木は、稿本の落丁と誤写を指摘し、併せて七言古詩「讀天淵詩呈加藤博士」（右）を贈った。**（翻字）**「拝啓、天淵詩稿本、昨日接到、一日の功を以て拝讀了、稿本ハ直に書留便を以て開明堂へ返付致候。落丁一枚と、詠史の曾參の曾ハ曹の誤写かと考へたゝし候ものと有之、其旨附箋致置候。御閲覧の際御注意被成下度候。拙詩貢稿、御一覧御擲還被下度、然後更に浄写拝呈可仕候。不悉。天淵先生侍史 乙未六月十七日夕 虎頓首」



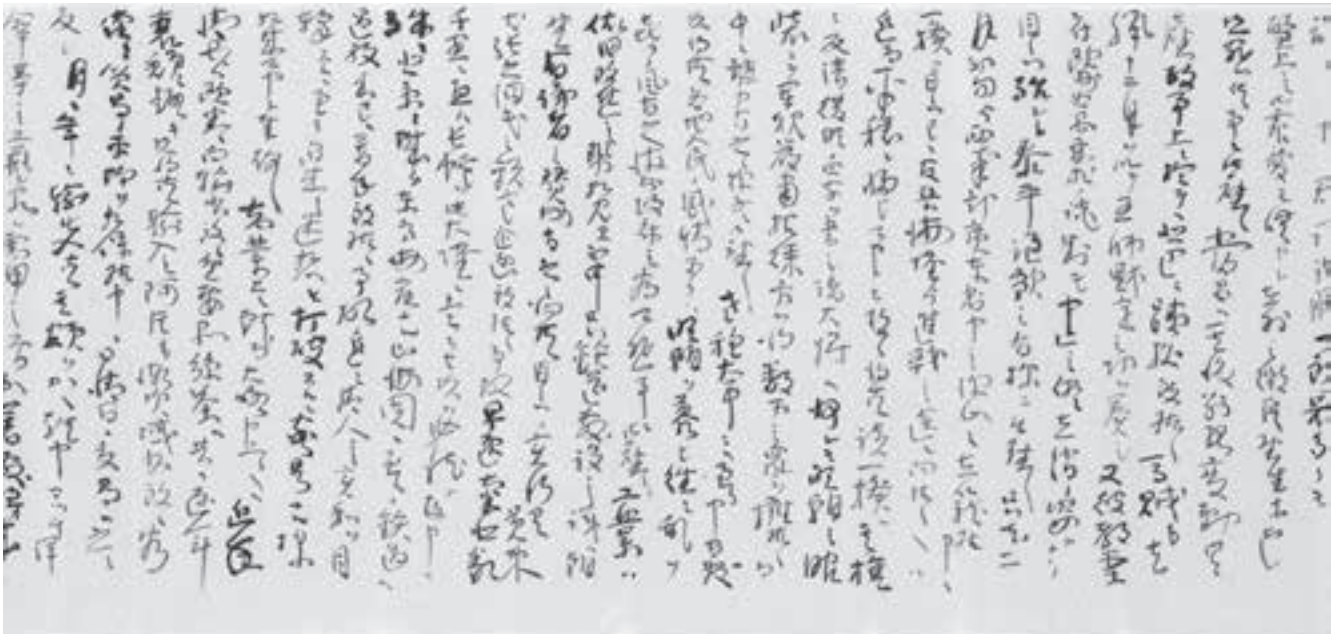
40 鈴木虎雄五言古詩「寄上加藤天淵博士」（昭和32年〈1957〉11月）

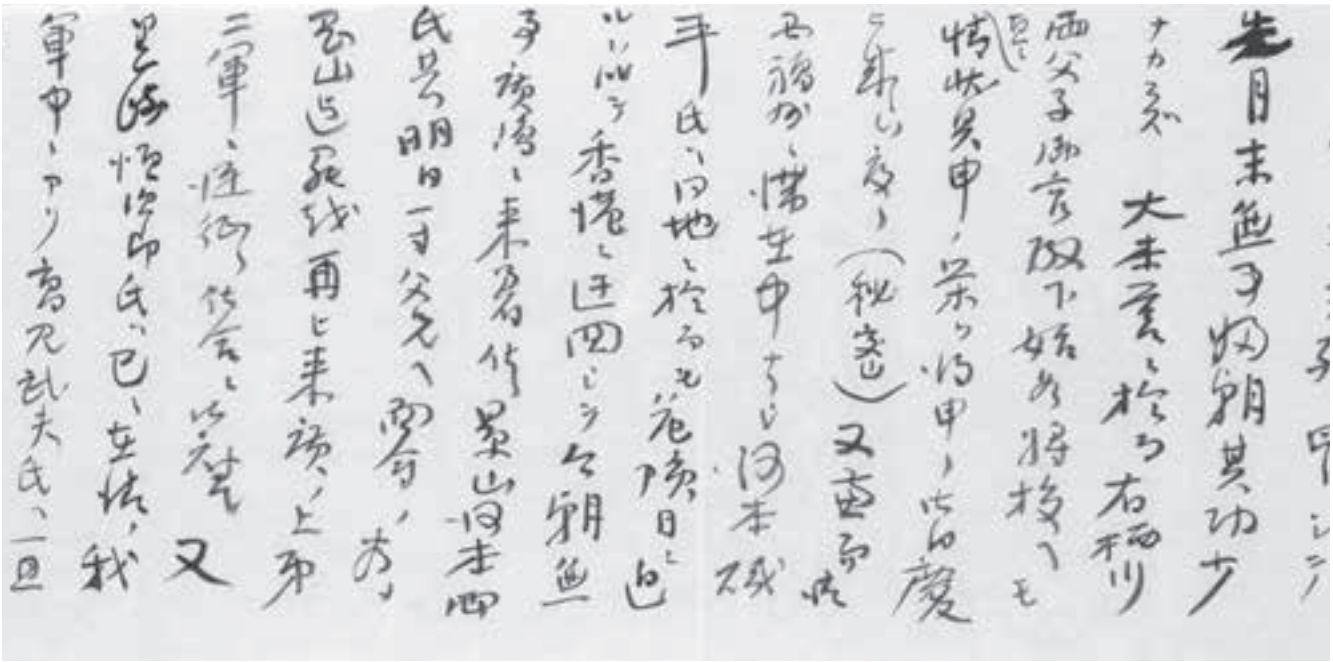
加藤虎之亮畢生の著作『周礼経注疏音義校勘記』が刊行された時、寄贈を受けた鈴木虎雄は五言古詩を贈ってその業績を讃えた。加藤の学問が清朝考証学を継承したものであり、「礼」の学問は文章と経学を兼備した学者でなければなしえないと述べ、今や払底してしまった儒教の徳治を称揚している。



41 「（野崎武吉郎・白岩龍平）条約書」（明治23年〈1890〉6月）

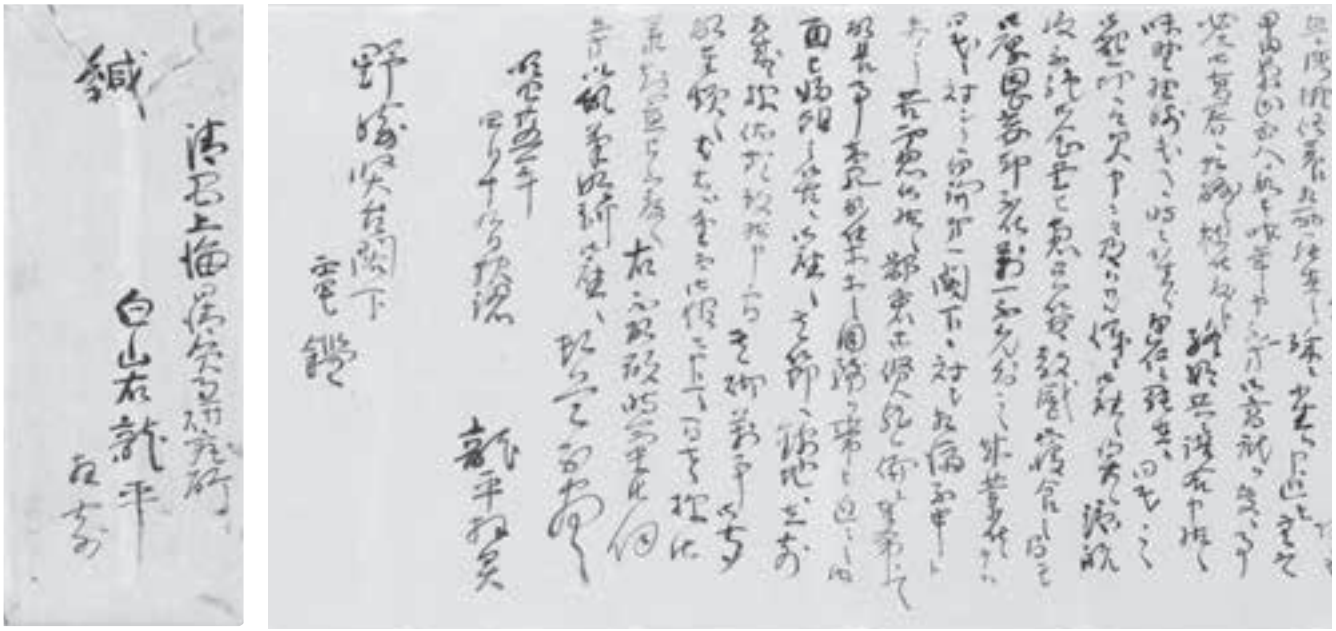
日中貿易の開拓者として名を馳せた実業家白岩龍平（1870～1942）は、初学の師岸南岳門の先輩能勢萬（二松學舍・司法省法学校を経て法曹）の薦めに従い岡山県の山村から上京する。東京で岸田吟香や元陸軍軍人荒尾精と知り合った白岩は、日中貿易の将来性を説く荒尾に傾倒した。荒尾は上海に日清貿易研究所を開設するにあたり、日本全国で学生募集を行い、岡山では西毅一校長の閑谷黌で学生募集の講演を行った。白岩は閑谷黌生に交じって入学するが、その際に白岩の学費は味野の塩業家野崎武吉郎が肩代わりした。展示品は学費納付に関して野崎と白岩が取り交わした契約書である。岡山の豪農出身で県庁官吏を務めた野崎萬三郎のもとに残された契約書の写しであり、「岡山縣」の用箋に書かれている。日清貿易研究所への学生募集が県単位で行われたことを窺わせる資料である。

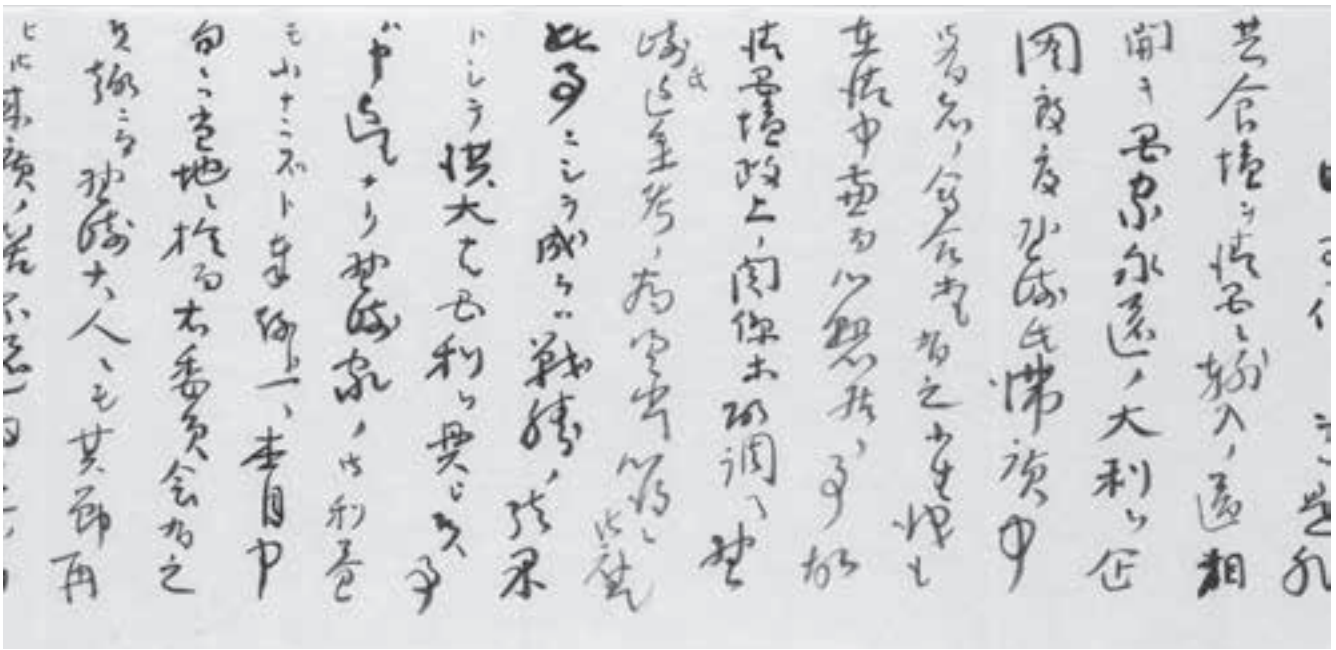




上段 *42* 白岩龍平書簡（明治25年〈1892〉4月19日付、野崎萬三郎宛、図版掲載は一部分）

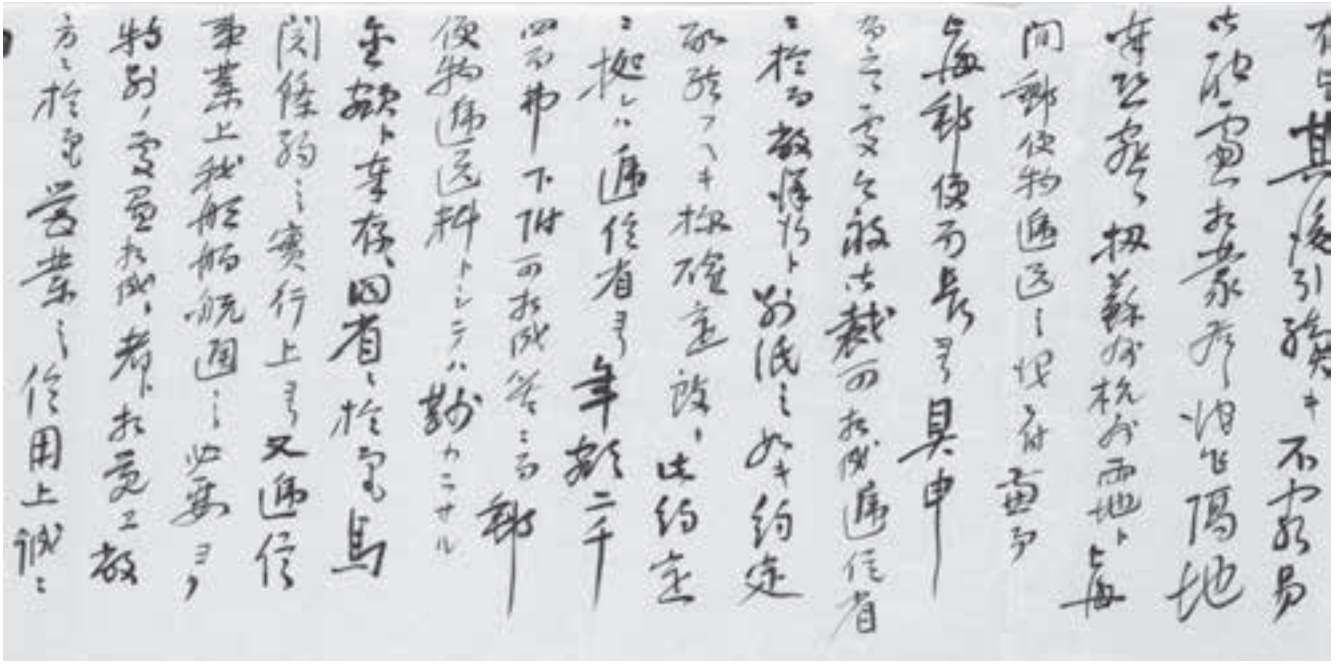
日清貿易研究所在学時の白岩龍平書簡。広東省各地での「反清復明」暴動、鉄道敷設に関する近況、日清貿易の好調などを伝えており、在学一年半を経過した白岩の中国政治・経済にわたる現状分析の進境を示す。白岩の学術と実習への熱意は依然極めて高かったが、この翌年、白岩は京都東山若王子に引き籠っていた荒尾精所長を出迎えるために研究所に無断で帰国した廉で、卒業を前にして４月１日付けで退校処分を受けてしまう。しかし処分後も白岩はなお上海に留まりつづけ、新設された日清商品陳列所において実地に日清貿易事業の修得に励んだ。野崎武吉郎と取り交わした契約書では、中途退学の場合、学費全額を即刻返済することになっていたが、野崎の恩情により返済は免除されたようである。白岩は、後にその長女艶子を娶ることになる西毅一と近く、曽国藩の文集を出版したり、『大正詩文』に漢詩を寄稿するなど、漢学に造詣が深かった。また筆まめで筆力に富み、現地生活が長く中国事情に通じた白岩の識見は、次第に周囲から一目置かれるようになる。

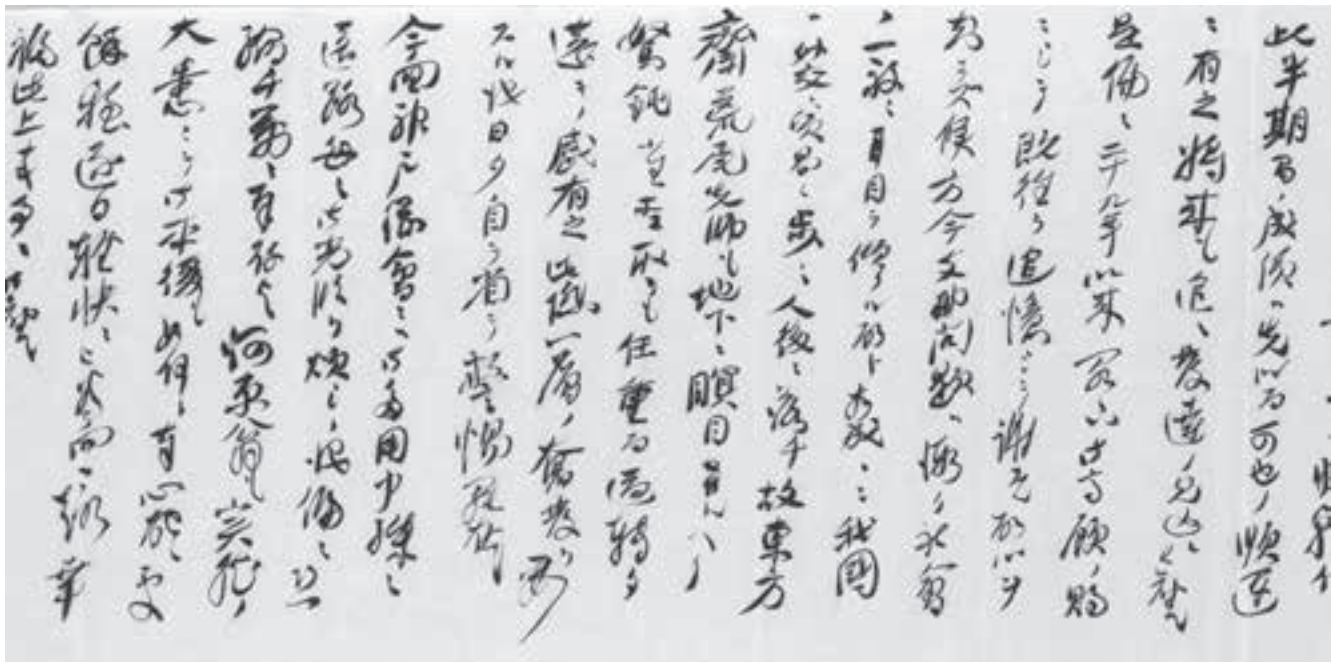




下段　43　白岩龍平書簡（明治27年〈1894〉11月3日付、野崎萬三郎宛、図版掲載は一部分）

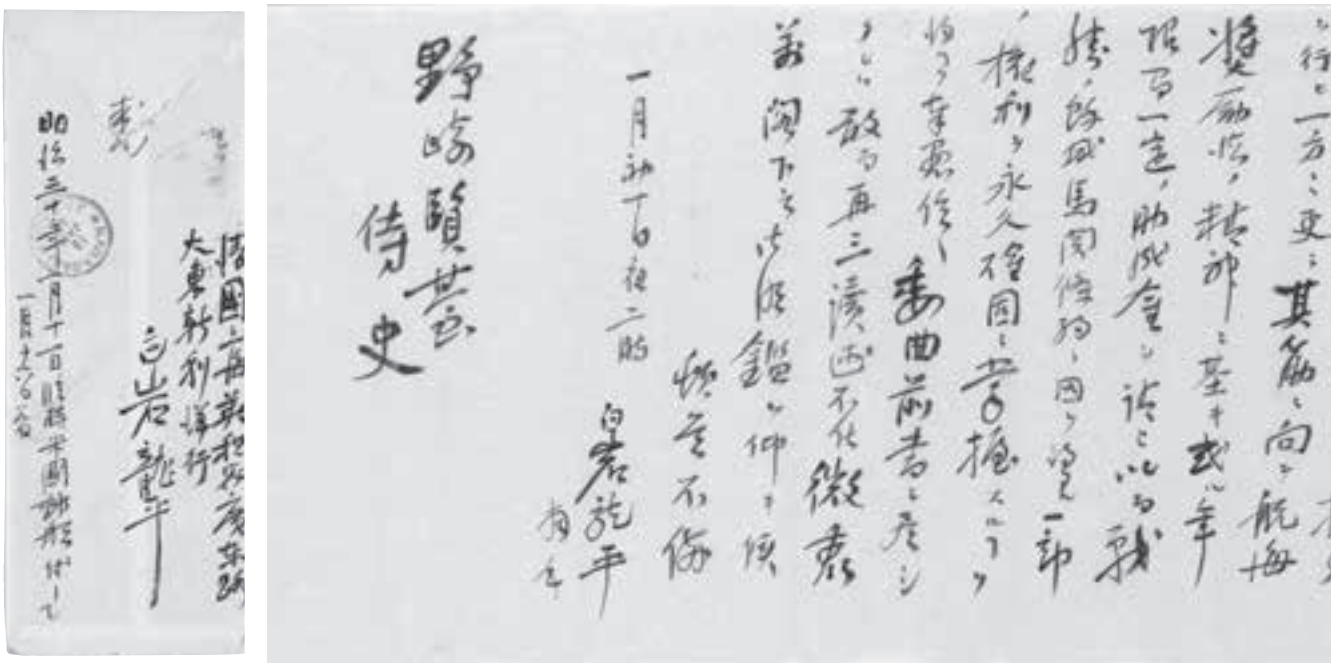
日清戦争という未曽有の事態に際会して、中国事情に通じた日清貿易研究所の生徒たちは通訳官等の任務を帯びて活動することになった。開戦に先立ち、白岩は7月12日に日清貿易研究所に復学が許され、卒業証書も授与されている。そして荒尾所長からの電報を受けて即日上海から乗船し、8月11日に門司港に着岸、郷里岡山を経て、18日に東京に到着した。大本営付となった白岩は、10月5日に東京を発って広島に向かった。日清戦時下の白岩書簡は、日清貿易研究所の同学たち、特に福原林平・高見武夫（福原・高見は間諜容疑により処刑）・甲田松太郎・景山長次郎・河本磯平・黒崎恒次郎ら岡山の同郷人の動向について報じている。一方、貴族院議員でもあった塩業家野崎武吉郎は、この時期、食塩の中国輸出に取り組んでおり、白岩はこの件についても報じている。10月に広島で臨時帝国議会が開かれた後、野崎は全国の塩業家に呼び掛けて11月に厳島で大日本塩業同盟会を立ち上げ、翌年2月の第8回帝国議会では「食塩輸出のための彼我塩業状況調査」が可決されて、内務省技師が遼東半島に派遣されることになる。

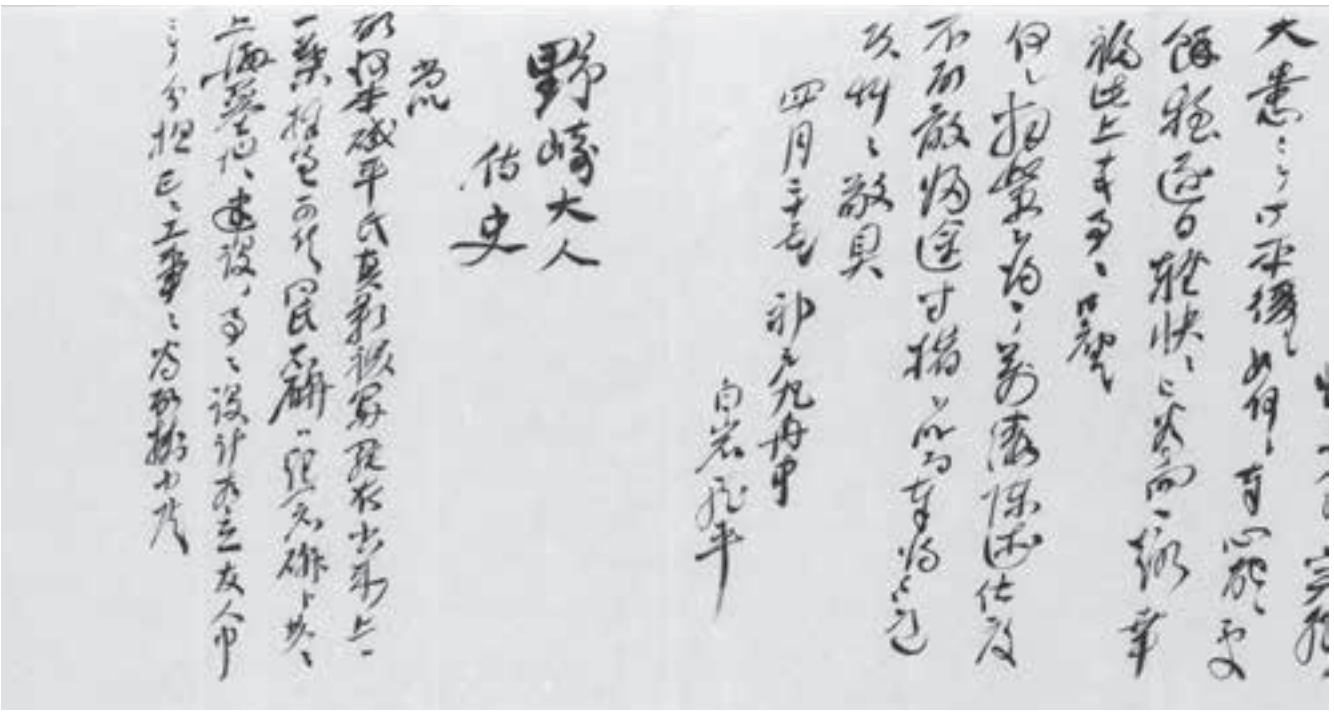




上段　*44*　白岩龍平書簡（明治30年〈1897〉1月10日付、野崎萬三郎宛、図版掲載は一部分）

白岩龍平は、日清戦争後の講和条約による特権条項に基づく「内河航路」を実現すべく、明治 28 年 11 月の渡航以来、上海を拠点に杭州・蘇州・漢口を往復して新開港地を視察し、地方官の抵抗に苦しみながらも珍田捨巳上海総領事らの支援を受けて翌 29 年 10 月には上海―蘇州―杭州を航行する大東新利洋行を開設した。中国航路が緒に就いた矢先、白岩は恩師荒尾精を喪い（黒死病により台湾で逝去）、野崎武吉郎からは一旦帰朝するよう勧められたが白岩は聴き容れず、翌 30 年にかけて中国航路拡張のために獅子奮迅の働きを見せる。展示品では、白岩は大東新利洋行の上海―蘇杭航路において郵便逓信事業を請け負うことと引き換えに、逓信省から逓送料金を受け取る契約について報じている。但し、公金を受給するためには大東新利洋行の会社組織を整備することが前提とされ、そのために白岩は官民への働きかけを続ける。近衛篤麿の知遇を得、外務・逓信両省を通じて大阪商船に協力依頼し、30 年 10 月末、岡山の杉山岩三郎と大阪商船の前社長河原信可（岡山出身）の会合によって基本合意に漕ぎつける。翌 31 年には、大東新利洋行を改組して大東汽船株式会社を立ち上げた。実業家白岩龍平の最初の成功であった。



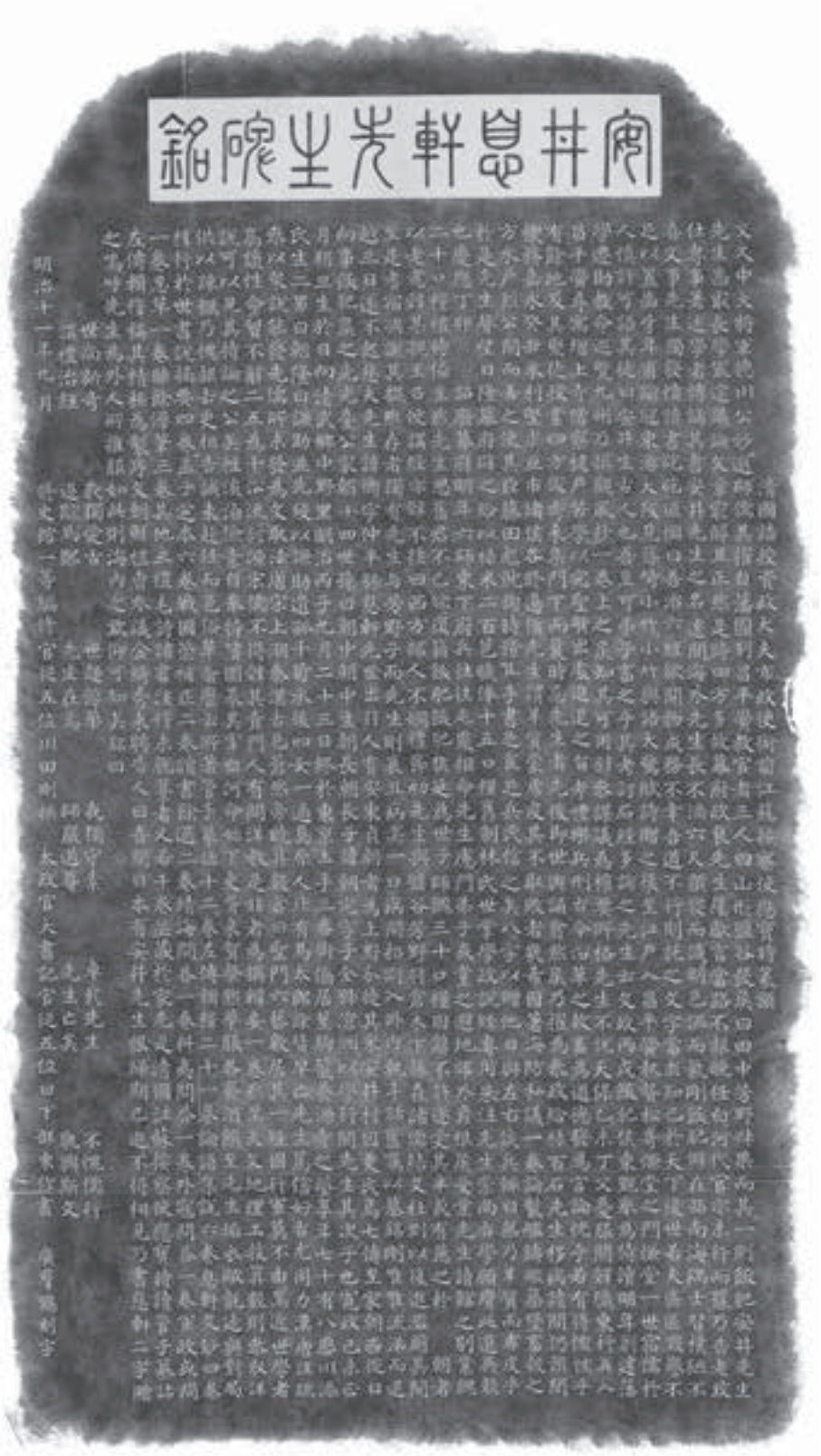


下段　45　白岩龍平書簡（明治32年〈1899〉4月25日付、野崎萬三郎宛、図版掲載は一部分）

明治31年4月30日の岡山における会議において大東汽船への組織改編に関する最終議決が行われ、大東汽船株式会社は正式に登記された。明治30～32年の白岩の行動を追うと、30年3～6月に岡山・大阪・東京を往還し、一旦上海に戻り、9月に再び帰朝して翌31年7月まで日本で活動し、この間に政府援助が確定して大東汽船株式会社の経営基盤が漸く確立する。10数年ぶりに郷里で正月を送った白岩は、日清戦争殉難の旧友の親族を訪問している。32年2月には河原信可とともに岡山を訪れて杉山岩三郎らと会合を持ち、東京に向かい、一旦上海に戻り、4月22日に再び上海を発って帰朝した。展示品の「方今、支那問題ハ漸ク社會ノ一般ニ耳目ヲ傾クル所ト相成候ニ、我國ハ外交ニ貿易ニ、歩々人後ニ落チ、故東方斎荒尾精先師も地下ニ瞑目セサルヘク、駑鈍小生等ニ取テも任重而道轉タ遠キノ感有之、此際一層ノ奮發ヲ要スル儀、日夕自ラ省テ警惕罷在候」という白岩の言葉は、最初の日中航路事業を成功させた実績への自信と、恩師荒尾精から継承した日中貿易事業の先覚としての自負が感じられる。

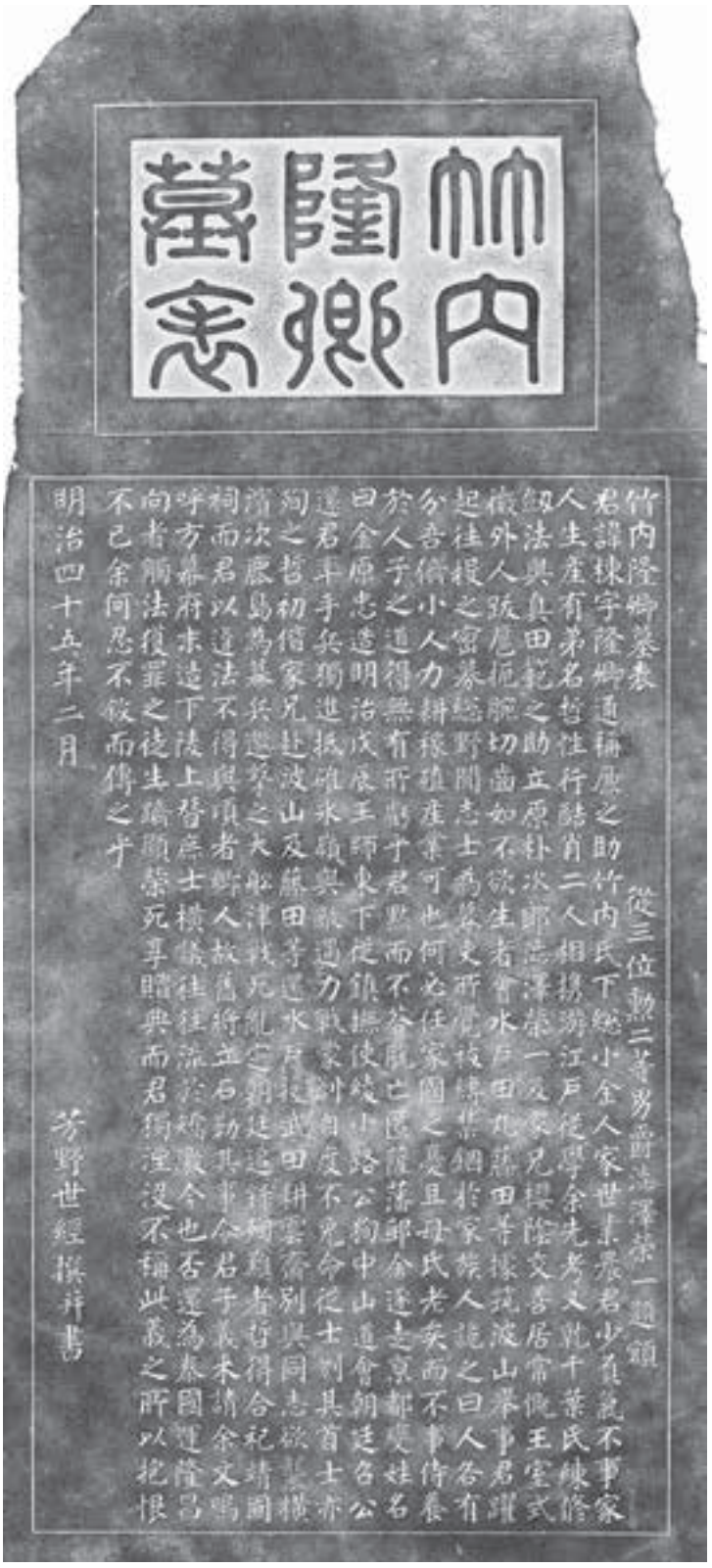
46 芳野金陵撰「新建篠山学記」拓本（明治10年〈1877〉4月、福沢諭吉題額、大島堯田書）

文久三博士の一人であり、大学の博士として新政府にも出仕した芳野金陵の家塾逢原堂には、廃藩置県後に東京に集まった華族の子弟たちが多数入門した。丹波篠山藩主の家に生まれた青山忠誠（あおやま　ただしげ 1859 ～ 1887）もその一人で、忠誠は士族子弟の教育のために篠山に私立中学を建てた。「学記」から、同校は儒教による徳育と洋学による知育を兼備した学校を目指したことがわかる。題額を揮毫した福沢諭吉も学校建設の相談を受けた一人であった。



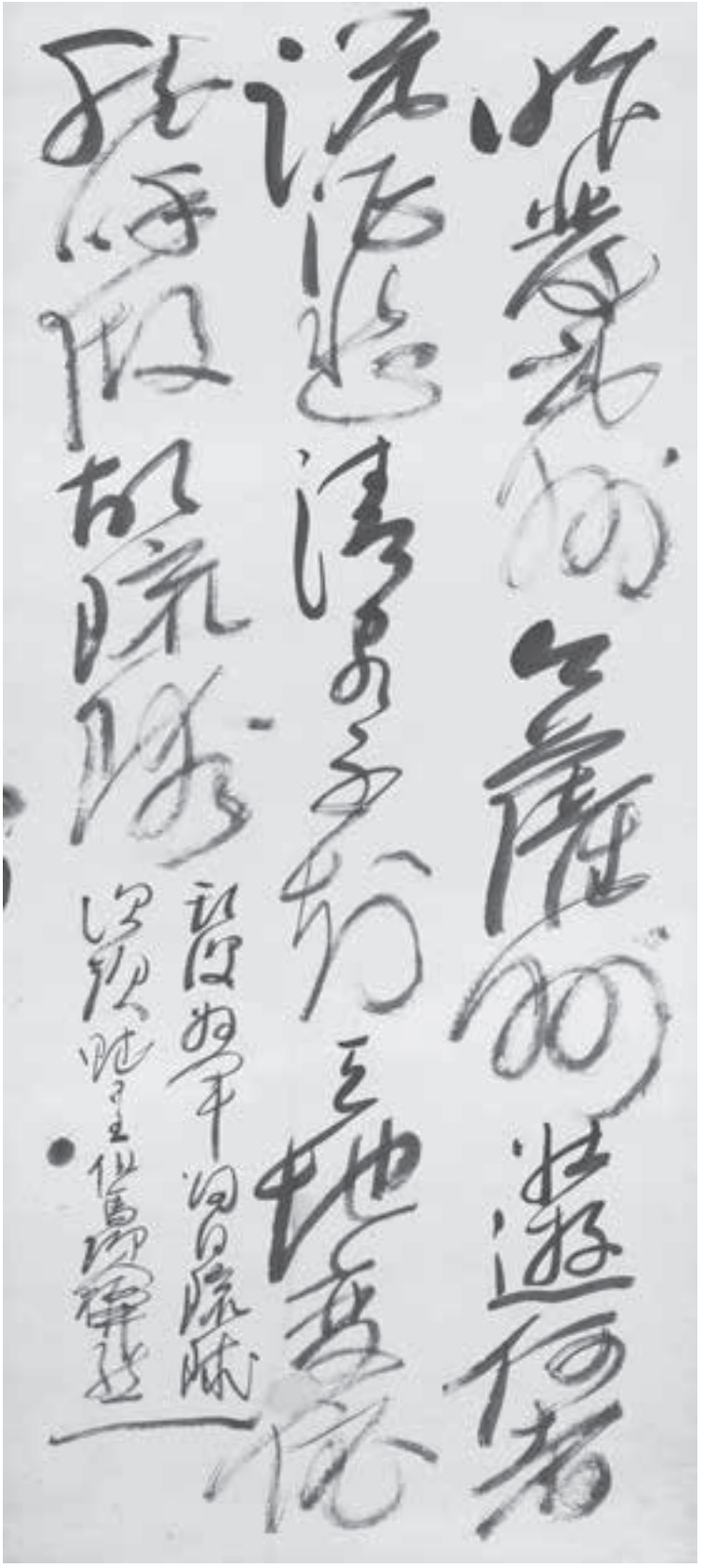
47 川田甕江撰「安井息軒先生碑銘」拓本（明治11年〈1878〉9月、應寶時篆額、日下部鳴鶴書）

幕末の大儒安井息軒の事蹟を叙した1400字を超える長文の碑銘。安井は芳野金陵の旧友で、また芳野金陵・塩谷宕陰とともに文久中に昌平坂学問所付儒者を拝した。撰文者川田甕江（1830～1896、名は剛）は備中玉島出身で、江戸に遊学して安井息軒らに学びその文才を見出された。川田は山田方谷の意を帯した三島中洲の勧誘を受けて備中松山藩に仕官し、江戸遊学の人脈を生かして幕末維新の困難な時期に江戸での情報収集や渉外活動に当たった。「初先生與鹽谷芳野羽倉木下藤森諸儒結文社、剛以後進廁其間」、「一日病間招剛入臥内、執手話舊、嘱以墓銘」という言葉からは、川田が老大家から若くして認められ、安井息軒門の高弟として自他ともに許す存在であったことが分かる。



48 芳野世経撰并書「竹内隆卿墓表」拓本（明治45年〈1912〉2月、渋沢栄一題額）

竹内隆卿（1837 ～ 68、名は棟、通称廉之助、変名金原忠蔵）は、下総小金出身で、江戸で芳野金陵や剣豪千葉周作に学び、立原朴次郎・渋沢栄一・芳野桜陰らと交流。弟哲次郎と共に天狗党の挙兵に参加したが捕縛され、弟は戦死。後に廉之助は薩摩藩邸に匿われ、相良総三の赤報隊に参加したが、賊名を着せられて信州追分で自刃した。哲次郎は靖国神社の祭祀対象になったが、相良総三や廉之助は祭祀に与らず、関係者が復権を求めて活動していた。金陵の四男芳野世経（衆議院議員･東京府会議員を歴任）は史談会で亡父・亡兄ゆかりの竹内隆卿の講演を行ったことがあり、渋沢栄一も相良総三の復権を支援した。渋沢栄一は大正2年2月21日に葛飾郡小金町東禅寺で執り行われた同碑の除幕式にも出席している。



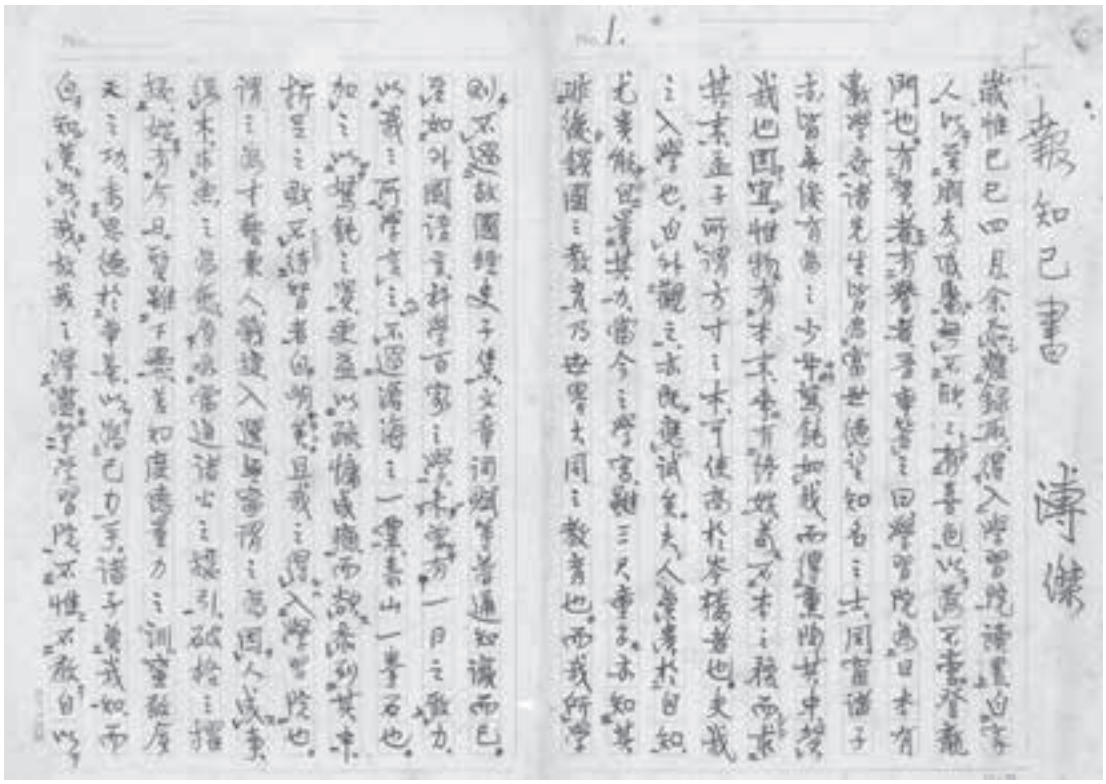
49 桜井熊一書幅「(七絶) 斯波将軍帰日琉球次韻賦呈」

桜井熊一（1843 ～ 1931、後に勉と改名）は但馬国出石藩儒の家に生まれ、芳野金陵に学び、内務省に入り地理局長を務めた官僚。展示品は桜井が斯波某の琉球に関する詩に次韻した七言絶句で、清国人が琉球を旧来の朝貢国とみなしているのは、日本による実効支配が進んでいる現状認識が不足していると詠じている。

「昨發武州今薩州　壮遊何者説征愁　清客不知天地変　依然呼做故琉球」

50 塩谷時敏書画幅（明治21年〈1888〉4月）「戊子四月逢原会賦似諸彦」）

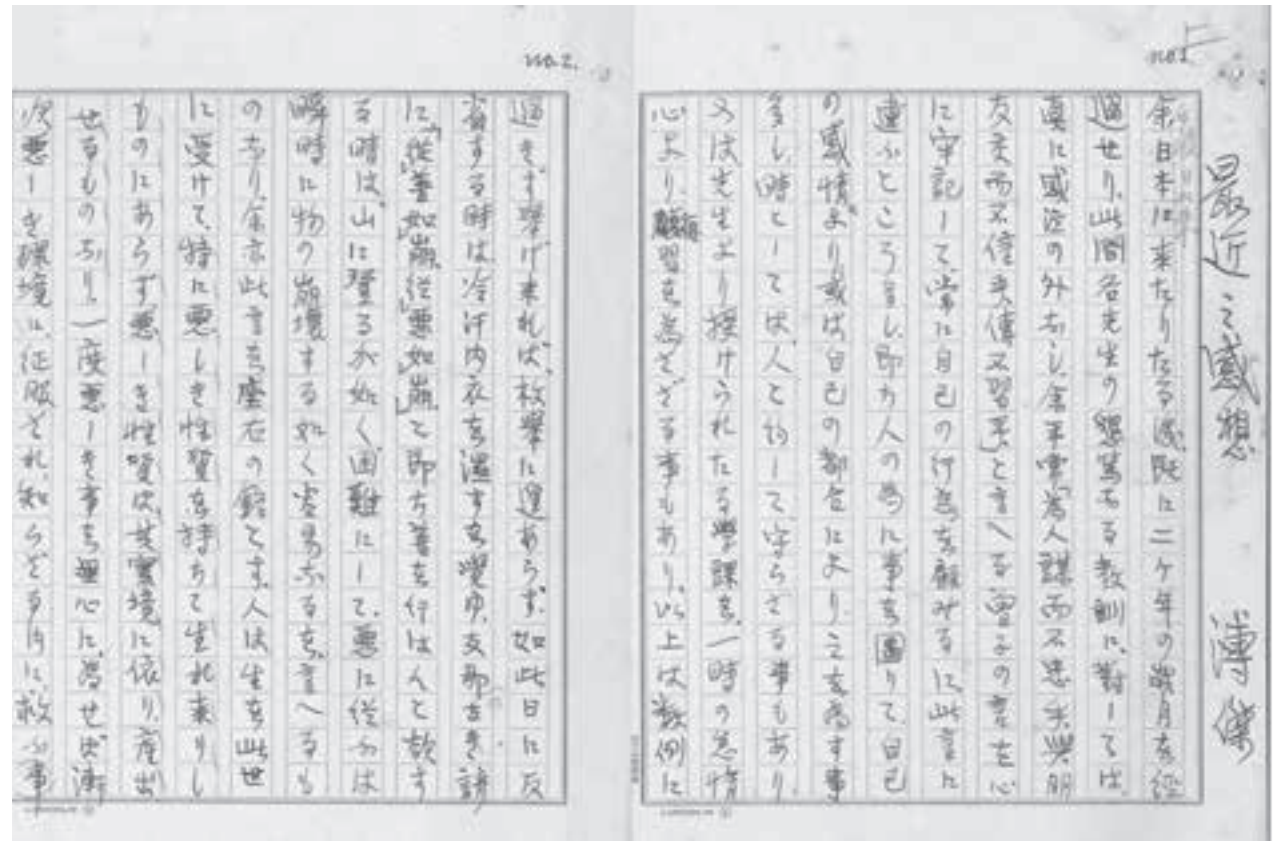
芳野金陵の歿後、旧門人たちは金陵の嗣子世経を中心に「逢原会」を結成して、3・4月と9・10月の春秋二回、大塚窪町の芳野邸で会合を開き親睦を重ねた。塩谷時敏（1855～1925、別号青山）は塩谷宕陰の甥（塩谷簣山の男）で、後に第一高等学校教授を長く務めた漢学者で、逢原会の中心人物の一人である。
「憶昔執経侍講帷　春風吹満海棠枝　相逢共話当年事　正及海棠花発時」



51 愛新覚羅溥傑（1907～94）と郭布羅潤麒（1912～2007）の作文

①溥傑「報知己書」（昭和4年〈1929〉4月）

退位後の宣統帝溥儀は、大正末年に天津租界に移り、後に満州国皇帝となるが、この間、私財をもって近親者を日本に留学させた。実弟溥傑は潤麒（婉容皇后の実弟）とともに学習院高等科に留学し、そこで芳野幹一に学んだ。展示品は、幹一の手元に残った学習院生徒の作文のなかに含まれていた溥傑と潤麒の作文。来日から比較的日の浅い時期の溥傑の「報知己書」は雄渾なペン書きによる中国文語文（漢文）で書かれ、訓点まで施されているが、訓点は必ずしも正しくない。文官・武官が人民を苦しめる弊政が続いていると述べて、中国が抱える問題を指摘し、中国青年への奮起を促している。



最近之感想　溥傑

余日本に来たりたること既に二ケ年の歳月を経過せり。此間各先生の懇篤なる教訓に、翻て、真に感激の外なし。余平常為人謙而不忠実、朋友交而不信、夫傳不習乎と言へる言葉を心に常記して常に自己の行為を顧みるに此言に違ふところなし。即ち人の為に事を図りて自己の感情より或は自己の都合により之を変ずる事多し。時として、人と協して守らざる事もあり。又は先生より授けられたる学課を一時の怠惰心より疎略に習ふ為さざる事もあり。以上は数例に過ぎず。挙げ来れば枚挙に遑あらず。如此日に反省する時は冷汗内衣を濡す。嘗て、支那古書に「従善如崩、従悪如崩」と即ち善を行はんと欲する時は、山に登るが如く困難にして、悪に従ふは瞬時に物の崩壊するが如く容易なる意味へる。の通り余が此言を座右の銘とす。人は生を此世に受けて、特に悪しき性質を持ちて生れ来りしものにあらず。悪しき性質は、其環境に依り、産出せるものなり。一度悪しき事を習慣に為せば、漸次悪しき環境に征服され、知らず知らずの内に、故小事

為、何時迄も救国の目的を達せず、人心も革むるべし。余の思ふに国を治むるの根本原則ありと。而して、次に芳野先生より賜はりたる日本人と言ふ書を出して、その人民、これを読み終へと言ひて、これを渡せり。その人民半日位にて、これを読み終りたる後、余は、この本は、明治天皇の勅語に基づき、解釋せるものなり。これを見れば、明治維新の偉業の実現せる原因を明瞭に世人と思ふ。即ち、維新の大業は偶然に成功せるものにあらず。大和民族の真精神に基きて実現せる事あり。凡ての国家は無数の個体を集合して成れるものなり。国体の基本を為すものは、一個一個の人民なり。先きに一個一個の良き人間を作りて、之を集りて、始めて、良き国体を成し、遂に始めて、良き国家が出現するものなり。以上の論説ある証明に依りて、余の自省する積りは、迂闊の事なりと思ふと言へる後、この人民、黙して、日本人を座右より遠ざけ、特に、近頃の感想を述べ、試験の作文とす。

経国の大文字自重をこれ祈る

②溥傑「最近之感想」（昭和５年〈1930〉）

混乱を深める中国の現状に関して、溥傑は国民精神の改革を急務とするとの見解を持しており、同学から迂遠との非難をうけた。溥傑は芳野幹一から薦められた『日本人』の所説を援用し、明治維新の偉業が大和民族の真精神に基づいて実現したのと同じく、全ての国家はその構成員である人民一個一個を良い人間として養成することによって、初めて良い国家が出現すると述べて、これに反論した。溥傑が中国人民の自覚を促すことが重要であると考えていたことがよく窺える。末尾に幹一の「経国の大文字自重をこれ祈る」という寸評が記されている。

旅行　　溥傑

今年日本へ旅行致好きです。殊に美色の京の日本へ来て一番活潑旅行の趣味を一層面白く感じて居ります。夏には海へ海水浴があり山へアルプル連峰を踏破し千年不融の白雪に驚ろき、冒険を企くなれば程良い気持がします。又富士の登山も良い体の一番面白いことと思います。就中には紅葉狩や草狩や月見等は皆私の一番好きなものです。殊にその中の紅葉狩は実に面白い事と思います。この間学校の史学会の同人と共に鎌倉と日光の指導に依りて、日光見物に行きました。一番の隆つた所は華厳滝と中禪寺湖をゆっくり観賞することが出来ました。でしたので甚だ残念と思います。なぜ自働車に乗って、周覧すると大変に満山の紅葉は西に濃はれて一層鮮の様に目漫しい程綺麗です。と私は思う次第です。冬に成ります。スキーや冬季登山は盛々活躍の季節に成ります。私はスキーは勿論出来ない。大変良い景色の所へ行って、紅葉狩等特に学ぶことが一番好きなことです。

指導

③溥傑「旅行」（昭和４年〈1929〉か）

「てにをは」の基本的な語法の誤りがあるので、来日して日の浅い時期の作文と考えられる。学習院の史学会の同人と日光見物に行ったことが記されている。

上　旅より　　七　潤麒

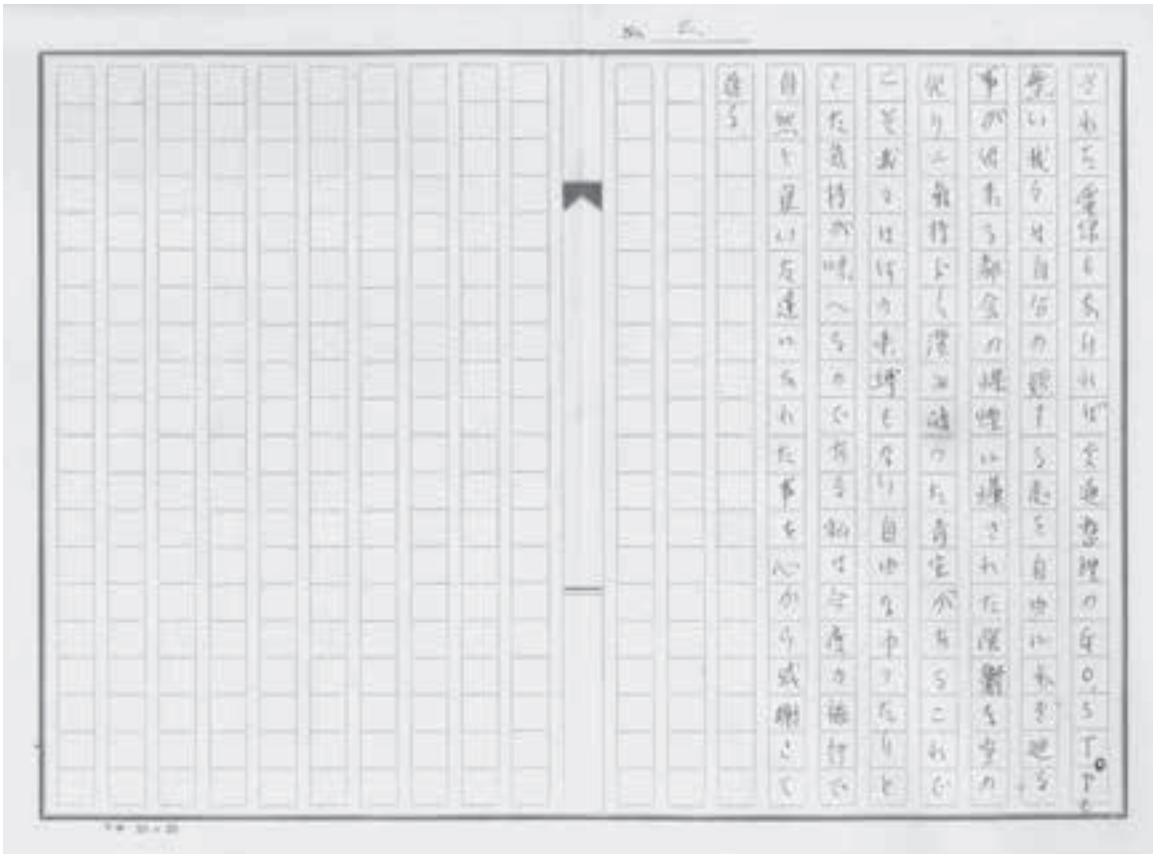
私は小さい時から旅行と云う事を大変好くで居りました。殊に古人の旅行する方法を美しく思って居りました。そして大きくなったら古人のまねをさっと、やって見よう。と何時も思って居りました。併し私はもっと小さい時から良い景色のない処に居りましたのですから実行する事は出来ませんでした。古人の方法と云うのは詩歌を作らないで酒を一杯飲まないのを之を肴にさげて通る景色を学ぶ為から行くその旅行の仕方であります。

先日日光に参りました。そして華厳の滝を見ては其の紅葉に成る陽明門を見ては其の華麗に感じました。併し方々の事などは法の方法を勉強に入れて酒を下げる古人の方法で行ったならばどんなに加面白いことだろうかとつくづく思ひました。

すばらしい明治神宮

④潤麒「旅より」（昭和４年〈1929〉か）

日光に行ったことが綴られており、上掲の溥傑の日光見物と同時期の作文と考えられる。



⑤潤麒「スキー旅行」

学習院で計画され、新潟県妙高の関温泉スキー場で開催されたスキー旅行に参加した時の作文。暢達な文章で綴られており、潤麒の日本語能力の進捗が窺える。

編集後記

近年、日本漢学、日本漢詩文に関する資料の本学への寄贈、寄託、購入が相継いでいる。今回の展示図録に収録した加藤虎之亮資料、芳野家資料、野崎萬三郎文書のほかに、寄贈資料としては、進鴻渓文書、山田準稿本、太田青丘旧蔵資料、佐久間氏収集古医書などがあり、また購入資料には紀伝道桑原家文書、阪谷朗廬稿本、片山猶存稿本、増村朴斎稿本、加藤復斎旧蔵書、吉川幸次郎関係資料などがある。その他にこれまで未整理のままになっていた三島中洲・雷堂関係文書の整理を進め、資料の補修・保存にも取り組んでいる。都心キャンパスのスペース不足はいかんともし難いが、鋭意、デジタル画像撮影を進めており、デジタルアーカイブスを構築して公開を促進していく考えである。

今年は明治維新一五〇年の節目の年を迎えているが、本学における課題「近代漢学」の取り組みとしては、時流に流されず、また自己完結的な顕彰に堕せず、今後の指針となりうるような過去の検証でありたいと考えている。

最後になりましたが、資料の寄贈・寄託に格別の高配をいただいた芳野赳夫様、加藤忠正様に衷心より謝意を表します。

（町　泉寿郎）

二松學舍創立一四〇周年記念
平成二九年度　二松學舍大学資料展示室　企画展図録
新収資料展　近代漢学の諸相

発行日　平成三〇年三月一日
編集者・発行者
二松學舍大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「近代日本の「知」の形成と漢学」
本　部　〒一〇二―八三三六
東京都千代田区三番町六―一六
事務局　〒一〇二―〇〇七四
東京都千代田区九段南二―四―一四
印　刷
製　本　株式会社　サンセイ

（非売品）　2018 ©

二松學舍大学　〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16